

訂改
實業帝國讀本
卷八

375.9
Hq7
資料室

教
44
200

43376

教科書文庫

4
810
44-1925
20003 02850

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

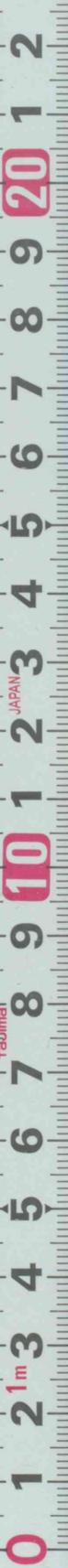
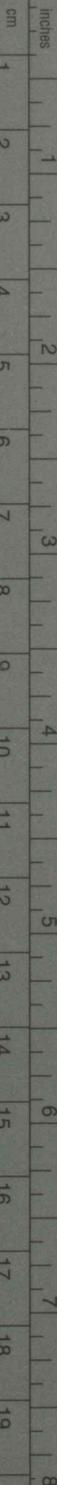


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



甲
乙
丙



教科書文庫
4
810
44-1925
2000302850

資料室
中央図書館

375.9
Ha7

文學博士芳賀矢一編

改訂
實業帝國讀本

東京
合資
會社
富山房發兌



広島大学図書
2000302850


訂改 實業帝國讀本 卷八

目次

一	上古史を讀んでその一	一
二	上古史を讀んでその二	五
三	一事一心	一〇
四	秋が來た	一三
五	草 箒	一五
六	松下村塾	二二
	妹にささす(自修文)	二六
七	熊野落	三三

八	ロンドン塔	三九
九	樞園文抄	四四
一〇	一書	五〇
一一	二書	五三
一二	三書 山家の興	五七
一三	枯野	六八
一四	芭蕉翁の臨終	七九
一五	芭蕉の生活とその俳句 (自修文)	八五
一六	光頼参内	九二
一七	待賢門の戦 その一	九六
一八	待賢門の戦 その二	一〇〇

一五	真夜中から黎明まで	七九
一六	冬の風物 (自修文)	八四
一七	日出観	九〇
一八	今様三題	九七
一九	安宅 その一	九九
二〇	安宅 その二	一〇四
二一	小謡	一一〇
二二	人格の表出	一一三
二三	麒麟 その一	一二九
二四	麒麟 その二	一三五
二五	孔子の故郷 (自修文)	一三三

二四	無爲の祭司	二七
二五	梅	二四〇
二六	小野の御室	二四四
二七	あげ雲雀	二四七
二八	花と雨	二四七
二八	一 花のさだめ	
二八	二 雨の興	
二九	春と人	二五四
三〇	我が國の文化	二六一
	國民的獨創へ(自修文)	二六九
目次終		

改訂實業帝國讀本 卷八

一 上古史を讀んで その一

我が國最舊の典籍は、元明天皇の和銅五年に太安麿が撰進した古事記三卷と、それから八年の後、元正天皇の養老四年に舍人親王等が撰修せられた日本書紀三十卷である。これをエジプト、支那若しくはギリシヤ、ローマなどの古書と比べて、時代に於て必ずしもその舊さを誇ることは出来ない。しかしながらこの記紀の二典が撰進せられた時代から引續いて存在して居る帝國、しかも萬世一系の皇室を戴いて、國運の益、伸張して行つた國家は、全く世界に比倫を見ないのである。我が國開闢以來の事を叙述したこの二典に

(一)第四十三代

(二)第四十四代

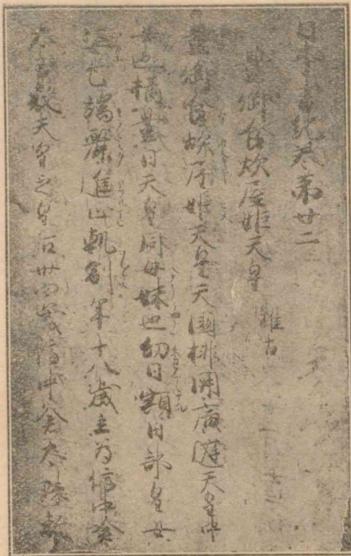
よつて、我等は遠く建國の當初に遡つて、我等が遠つ祖の精神をも讀得るのである。二典の記事はいはゆる神代に始つて居るが、永く文字のない時代を口から口へ傳唱せられた爲、又その言語に譬喩や神秘的な言廻しの多い爲、又は實際の史實ばかりでなく、幾分か空想から産出された傳説を交へて居る爲、今日の科學的見解では合點の行かぬ事が少くない。且又今日の歐米各國にはかくの如き古代史のないが爲に、世人は往々我が神代史を荒唐不稽なものとして顧ない傾がある。こは實に淺薄皮相な考であつて、我等は一見荒唐不稽と見えるこの古典中から、我が建國の精神をも見出し、我が國民性の本質をも窺ひ知らねばならぬのである。否これ等の古典に現れた我等の祖先の精神は、やはり今日の國民の腦裡に宿つて、國家の昌運を導きつゝあることを知らなければならぬ。

荒唐不稽



禮阿田稗び及侶萬安太 王親人舍

我が神代史は我が國家の成立、皇室の由來を説くのが主であつて、宇宙創造説などを述べるのが本旨ではない。それ故外國の事などは何等の接觸もなく、ひたすら我が日本帝國の成立に就いて



(藏社神野北) 本寫古紀書本日

ばかり説いてある。天地が別れてから、伊弉册命はまづ我が日本の國土を産ませられる。大八洲の島々を始として、幾多の小島を産ませられる。續いて風の神、水の神、野の神、山の神、火の神などを産ませられる。それから最後にこの國土に君臨すべき神をいふので、天照大御神がお生まれになり、それが高天原にお上りになつて、その御子孫が、この葦原の中つ國即ち大日本國を知ろしめすことになるのである。この神話の底に潜んでゐ

る思想は何か。國土と皇室が御兄弟の關係になつてゐるといふことは、國土と皇室の離れることの出来ないといふ思想の表現である。この強い信念が即ちこの神話を成したので、かういふ神話が、外の國にあるであらうか。開國以來、君臣の分が明白である我が國でなければ、かういふ神話の出來ようはずがない。國土は即ち皇室であり、皇室は即ち國土であらせられるのである。尊皇は即ち愛國といふ觀念が、この中に看取せられるのである。

我が國を開かせられた神の御末が即ち皇室である。皇室を尊奉する我等臣民は、遡つて皇室の御祖先を尊崇するは勿論である。ここに於て尊皇の心の厚いものは、亦必ず敬神の心が深いに相違ない。それ故尊皇は即ち敬神である。現神ををろがみ奉る眞心は、神祇に向つても同様に捧げられなければならぬ。敬神、尊皇、愛國はかくして相離れぬのである。上古史を讀むものは、まづこの古代精神を

看取して、さうしてそれが現實の社會の上にも生きて居ることを思はなければならぬ。國史のいつの世にもこの精神の自覺せられた時に於て、國難が救はれたことを憶はなければならぬ。

二 上古史を讀んで その二

皇室の御祖先を天照大御神と申し上げて、それを天日即ち太陽と見奉つた思想にも、實に我が國民の特殊な思想が現れて居る。世界の神話には太陽を中心に置いて居るものが多い。しかもそれが直ちに君主の祖先であるといふのはない。これは敬神即尊皇、即愛國で、神、君、國の相離れない國でなければ生まれ出て來ないのである。太陽の天地を照らし、萬物を生育して行く絶大な勢力と無限な恩恵は、この國の人も感知するに相違ないが、これをその君主の遠祖と同一視するほどに君徳に感謝した國民は、外には見當らぬ

のである。國民が見當らぬのではない、太陽の徳に等しい君徳を施された王室が見當らぬのである。義は君臣にして情は父子。いふ仁慈の政は、建國以來今日まで一貫して居るのである。その仁慈の政に悦服した歴代の國民等は、常に皇室の御爲には眞心を竭して仕へたのである。皇室の御仁慈が、開國の昔から、よくもよくも深く國民の胸に泌みこんで居たので、太陽即ち日神、即ち皇室の御祖先と相離れることの出来ないやうになつたのである。

由來農業國民は殊に太陽の恩恵に感ずることが多い。春蒔いて秋收める。一年の所得は皆天日の力によるのである。我が國も亦農を以て國を成した。その天日に對する尊崇は當然の事であるが、その恩恵に感謝すると同様な感謝を以て皇室に對し奉つたところに、我が皇室對國民の、他國に見られない温みと親みが認められるのである。我が皇室の祭祀も専ら國民の幸福の爲に天神地祇に祈

られるのが本旨で、かの祈年祭から始つて新嘗祭に終る豊年の御祈願の事も、偏に人民の幸福、國家の安寧を思し召すからの事で、君は臣の爲に祈り、臣は君の爲に祈るのが古神道の精神である。

天照大御神は女性の神としてお立ちになつて居る。自らも農事を遊ばしたことは古典に見えて居り、大嘗を聞き召したことも傳はつて居る。又機殿を設けて神衣を織らせられたことも記されて居る。誠に勤勉なお方であらせられた。弟神の素戔嗚命が農事を妨害したり、その他種々な暴行をなされた時も、常にこれを見逃して居られたほど寛恕の徳にも富ませられ、度量のお潤い神様であつた。しかし素戔嗚命が天へ上つて來ると聞いて、こは我が國を奪ひに來るのではないかと、その時ばかりは男装し、武装し、稜威のをたけびにたけびて、御詰問になつた。常には平和主義で、國難に際しては奮然勇氣をお現しになつたので、その御氣象が窺はれるのである。我

稜威のをたけび

が皇祖たる天照大御神は、實際かくの如きお方でいらせられたと思ふが、又一方から考へれば、我が國民の理想が、この大神の御神格の上にあらはれて居るごも思はれるのである。我が國列聖の御政治は皆皇祖の御遺訓を繼承して行はれるので、いつの世に於ても、この仁慈の大御心を忘れられた事がない。常に神祇に祈つて國民の安寧幸福を希はれるのが即ちマツリゴトであつて、これは今日に於ても遺つてゐて、それが即ち宮中の祭祀である。皇祖から引繼いだ萬民愛撫の大御心、日神と同様に仰ぎ見た萬民渴仰の誠心、これが世界に比類のない國家を成し得た所以で、萬世一系の意義はそこに存するのである。

我が國民と生まれては、自國の歴史を讀む必要がある。過去なくして我等の今日はなく、今日なくして將來のあるはずはない。よく過去を知つて、更に將來の計を定めなければならぬ。外國の物質的

又は精神的物事を輸入するに際しても、國史を異にし、國俗の同じくない事情を考へねばならぬ。無條件に模倣することは遠慮しなければならぬ。

嗚呼、我が記紀の二典よ、我等は二典を讀んで、そこに幾多の貴重な國民思想の發露せられて居るのを見受けるのである。さうして我が帝國の今日あるのは、決して偶然でないといふことを感ずるのである。千二百年以來この二典はかくして常に新しい教訓を我等國民に與へ來つたのである。我が永世不朽な古典は、いかなる世にも新しい生命を有して、國民を啓發するのである。この典籍の存在することは、實に我が國民の誇であつて、この典籍の忘れられない限り、我が國家の基礎はびくごも動かぬのである。

こつ國のふみ見て知りぬ日の本の
國にまされる國はあらじこ。

因果の理

世渡るたづき

桃尻

境に入る

あらます

三 一事一心

吉田兼好

或者子を法師になして、學問して因果の理をも知り、説經なんどして世渡るたづきもせよ。こいひければ、教のまゝに説經師にならん爲に、まづ馬に乗習ひけり。輿、車もたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬などにて迎におこせたらんに、桃尻にて落ちなんは心憂かるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒なんど勸むる事あらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべし。さて、早歌こいふ事を習ひけり。この業やうく境に入りければ、愈よくしたく覺えて嗜みけるほどに、説經習ふべき閑なくて年よりにけり。

この法師のみにもあらず、世間の人なべてこの事あり。若きほどは諸事につけて、身を立て、大いなる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらます事ども、心にはかけながら、世をのぞ

千五百番歌
合によませ
給ける

あしのしほ
なむあまひ
くむしほ
ともしほ
に袖のいと
まなきまで

後鳥羽
院御歌

かに思ひてうち怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事にのみ紛れて月日を送れば、ここごとなすことなくして身は老いぬ。終に物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども取返さるゝ齡ならねば、走りて坂を下る輪の如く衰へゆく。

よめる書 ちよとよませ 終る

あしのしほ
なむあまひ
くむしほ
ともしほ
に袖のいと
まなきまで

吉田兼好筆蹟

か優ることよ
く思ひくら
べて、第一の
事を案じ定

めて、その外は思ひ捨てて一事を勵むべし。一日の中、二時の中にも、數多の事の來らんかに、少しも益の優らん事を營みて、その外をば打捨てて、大事をいそぐべきなり。何方をも捨てじこ、心にこりもちては、一事も成るべからず。例へば、碁をうつ人、一手もいたづらに

せず、人に先だちて小を捨て大につくが如し。それにまりて、三つの石を捨てて十の石につく事は易し。十を捨てて十一につく事は難し。一つなりとも優らん方へこそつくべきを、十までなりぬれば惜しく覺えて、多く優らぬ石には換へにくし。此をも捨てず、彼をも取らんと思ふ心に、彼をも得ず、此をも失ふべき道なり。

京に住む人、急ぎて東山に用ありてすでに行着きたりとも、西山に行きてその益優るべき事を思ひ得たらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。ここまで來着きぬれば、この事をばまづいひてん、日をさゝぬことなれば、西山の事は歸りて又こそ思ひたゞめと思ふ故に、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる。これをおそるべし。一事を必ず成さんと思はば、他の事の敗るゝをもいたむべからず。人の嘲をも耻づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。

徒然草

四 秋が來た

野口米次郎

わづか二三日のことで、

空氣が金びかりし始めました。

白羽二重をその中にさらしたなら、

きつと黄色に染まりませう。

今わたしは廊下の障子をあげ、

十月なかばの空氣を吸つて、

その甘いのに驚いてゐると、

どこからか無数の赤い蜻蛉が飛んで來て、

わたしの目の前で入交り、

黄金の空氣を浪うたせます。

〔Curtain〕

澤山ある花の中で、わたしは木犀を一番すきます。
 葉の下から小さな内氣な花が咲いて、
 人の知らない間に散つてしまふ。
 暑い夏から咲きごほして來た百日紅も、
 今は二つ三つの花が残つてゐるばかりで御座います。
 しばらく雨が降らないので、
 伽羅の黒びかりする葉もよごれ、
 廊下に懸けたカーテンのしみが特に目立つて來ました。
 地面はもはや薄ら冷たいので、
 けふは一疋の蟻さへ出てまゐりません。
 あゝ、秋が來ました。わたしのすきな秋が來ました。
 わたしが座敷から澄みきつた紫色の空を眺めてゐると、

〔Time〕

いつの間にやらわたしの目は見えなくなつて、
 わたしの耳へ過行く時の足音のみが響いて來るやうに
 覺えます……
 どうん／＼と御承知の時の足ぶみが、

五 草 箒

永井 荷風

白日門を閉ぢて獨り閑庭に飛花落葉を掃ふ時の心ほど、我ながら懐かしきはなし。

飛花は春に限らず、落葉亦獨り秋のみならんや。山茶花の落つる時、冬漸く寒く、八つ手の花、雪ならぬ雪を降らせば、梔子の實、落霜紅ごとも愈赤し。梅櫻、桃李のながめ、きのふと過ぎ、垣には卯の花の雪積りて、藤棚のかげに紫の房もやう／＼落盡せば、雀の子すでに巢立して、あたりは夏なり。五月、松の花は閑庭の苔に金砂を撒き、七

月、石榴の花は綠陰に緋の毛氈をのぶ。
 落葉は新樹の綠潮の如く湧出づる時より、庭の隅々垣の際に掃
 盡せぬばかり堆し。これ去年一冬の霜を忍びし椎、檜、扇骨木の如
 き常磐木の古葉、若芽の伸ぶるに隨ひ、風をも待たで落散るなり。春
 盡きんとして雨多く、世には流行風邪の噂もありて、一重の小袖俄
 に薄寒き夕暮など、かゝる常磐木の落葉窓の障子にはらゝゝと音
 づるれば、心は忽ち時雨の夕に異ならず、思はずとももの事ども何く
 れとなく思ひ出さる。

扇骨木の古葉の落ちんとする時、秋の楓の如く紅となり、青葉に
 交りてちらほら花の如く目立ちて見ゆる、風情あり。竹の落葉に夏
 の暑さは漸く烈しく、檜、椎の古葉は土用に入りてもなほ散りやま
 ず。ごかくするうち早くも秋立ちて、芭蕉の葉破れ、桐の葉落つ。
 桐の一葉に秋を知るごは誰もいふごこなれご、桐よりも早く散

(一)名は翼、支那
 清朝の學者、
 詩人。嘉慶十
 九年(西曆一
 八一四年)没、
 年八十八。

落つるは梅、櫻の葉なるべし。桐の中にも碧梧の如きは、十月の半
 ばその葉黄ばみて、なほ枝上に留れるを、見ること珍しからず。
 柳も梧葉、荷葉、芭蕉ごごもに秋には脆きものの中に數へられた
 れご、初冬十一月、山茶花もはや咲出でんとするに、御堀の柳を見れ
 ば、青き葉なほ落盡さざることあり。趙甌北が詩にもいはずや、
 初冬柳色

古語由來未可聽 爭傳弱柳望秋零
 誰知霜露凋傷候 萬木丹黃此尙青

年中の景物、およそ首夏の新樹と晩秋の黄葉といづれをか選ぶ
 べき。この時節兩つながら夕陽甚だ美なり。一は密葉の間を染めて
 友禪の如く、一は黄葉に映じて錦繡の如し。然れごも新緑は花にも
 似て束の間の眺なり。その軟き緑は長からず、梅雨晴の日の光漸く
 強くなり行くに隨ひ、緑は黒ずみて、終に盛夏の塵を浴ぶ。やがてい

つこもなく朝夕の寒さ身にしみ來れば、風うち騒ぐ梢のいたゞきより、木の葉はその縁漸く黄ばみ出して、次第に日蔭の小枝にも及ぶほごに、初に色變へし木の葉、まづひら／＼と閃き落つ。
去年の秋より冬へかけて、われ人なき庭にたゞ一人落葉掃きつ、木々の梢の色變り行くさま仔細にうち眺め、つれ／＼の餘り手帳に控へ置きけり。春より夏にかけて若芽、青葉の緑、木々により濃淡強弱さまざまに湧出づるを、若し西洋の音樂に譬へて、緑の管絃樂も名づけ得たらんには、憔悴の詩情いひ難き黄葉の管絃樂は、まづ十月よりその序曲をば奏で出づるなり。
梅、櫻は盛夏の候早く病葉の黄ばみ落つること多けれど、そは數へざるべし。後の彼岸に残暑も今は全く去りぬる夕、碧梧、椴、槐、皂莢の葉はいつしかうち黄ばみたり。わが庭に一樹の木蘭あり。木蘭は人その花をのみ愛づれども、黄葉亦なか／＼に捨難し。檜の高き梢

に百舌啼叫ぶ十月となりや、大きき榭の如き木蘭の葉は、淡くほのかに黄ばみ出づ。その色、曇りし日の夕まぐれ、夜將に來らんとする境には、白く影の如くに浮立つさま、はかなくもまたあはれなり。さても十一月となり、冬愈、迫り來れば、色淡き黄葉は次第に褐色となるより早く枝を去るなり。
萩もわれ花のみならで、枯行く葉をも愛づ。十月半ばより萩の葉は黄ばむほごに散りかけて、十一月に至れば一葉をも留めず、凋落まごごに早し。これに比ぶれば、秋草の中にて葉鶏頭の十一月半ば菊花盛の頃まで衰へながら立ちすくみたる、潯陽江頭琵琶に泣く棄婦の心にも喩へつべし。
藤棚に藤の葉の淺く黄ばみたるも趣あり。臘梅の黄葉は黄昏の微光を得てあはれいと深く、皂莢の細き葉は落花に異ならず、椴の落葉はそゞろに驛路の鈴響く街道の夕を思はしむ。これ皆十一月

の光景にして、この月柿の葉紅に染まり、蔦の葉亦赤し。

楓葉は菊花と並びて可憐の秋をなすこといはずもあれ。公孫樹の黄葉亦初冬十一月の美しき眺をつくる。ここに石榴の黄葉看來れば、その美敢へて公孫樹に劣るものならず。石榴の葉は柳の如く細きが、晚風に誘はれて、紛々として雨の如く散落つるや、滿地皆黄色となり、短き日の暮盡して、常磐木の木蔭いち早く暗くなり行くに、石榴の葉散敷く所のみ長く暮れやらねば、月の光照添へるか。疑はる。この葉、池の水に散積りて朽ちたる藻を蔽へば、いづれか水いづれか岸とも見えわかず。敗荷、殘柳と相俟つて、蕭條たる池邊の廢趣愈深し。

楓葉は蓋し搖落の殿をなすものなり。菊花凋み盡して臘梅の蕾點々數へ來らんとする時、常磐木の蔭に木枯をよけては、極月なほ楓葉の枝にあるを見ることあり。されど冬至に及びてあらゆる樹

木愈葉なきに至れば、菊は早くその切株に新緑の芽を生じ、水仙の葉亦三四寸も伸びて春風を待てり。園居年々景物相同じ。然れども看來つて常に興新なれば、草木のよく人を幸ならしむること、蓋し黄金にも優れりといふべきか。

— 荷風全集 —

六 松下村塾

徳 富 蘇 峰

吉田松陰は天成の鼓吹者なり。感激者なり。彼自ら己を空しうして他の善を採るを禁ずる能はざるのみならず、又他をして覺えず自己の精神意氣に同化せしむるを禁ずる能はざらしむる力を有す。これ彼が教育家としての特色なり。その踏海の策破れて下田の獄に繋がる、や、獄卒に説くに自國を尊び、外國を卑しむ、綱常を重んじ、人倫を叙すべきを以てし、狼の目より涙を流さしめたり。その下田より檻輿江戸に赴き、途三島を経るや、警護の下人に向ひ大義

綱常

を説き、人獸相距る遠からざる彼等をして、憤勵の氣色に現れしめたり。その江戸の獄に在るやいふまでもなし。後送られて長門野山の獄に投ぜらるゝや、その感化は同囚者に及び、獄卒に及び、遂にその司獄者までも彼が門人となるに至らしめたり。彼が在る所四圍皆彼が如き人を生ず。これ何に由りて然るか。薔薇の在る所、土も亦香しといふに非ずや。

而して彼が最もその鼓吹者たり、感激者たる特質を顯したるは、松下村塾に於てこれを見る。

松下村塾は徳川政府顛覆の卵を孵化したる保育場の一たり。維新改革の天火を燃したる聖壇の一なり。笑ふなかれ、その火燐よりも微に、卵豆よりも小なりと。赤間關の砲臺は粉にすべし。奇兵隊の名は滅すべし。然れども松下村塾に至りては、獨り當時に偉大なる結果を遺せるのみならず、流風遺韻、今に及んでなほ人をして欽仰

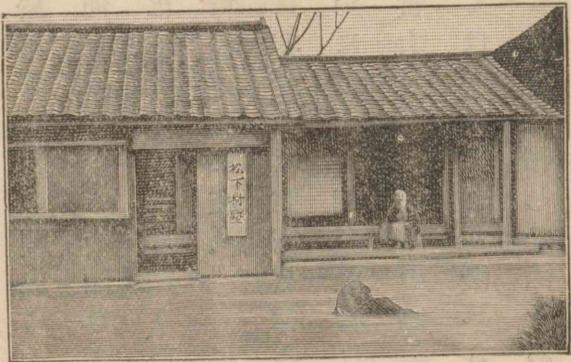
聖壇

襲用す

歎美の情禁ずる能はざらしむるものあり、

彼は安政二年十二月野山の獄より出でて、家に蟄居せしめられたり。而してその安政三年七月に至つては、蟄居中更に家學を授くる許を得たり。その名義とするところは山鹿流軍學なりと雖も、その實は然らず。彼はいはゆる専門的兵法家にあらず。彼は改革家なり。その教ふるところは改革の精神なり。その講ずるところは改革の偉業なり。

松下村塾の名はその内叔玉木、外叔久保等が相接してその村學に用ひたるころにして、松陰これを襲用したりと雖も、吾人がいはゆる松下村塾に至りては、松陰を推してその開山とせざるべからず。蓋し松陰



松下村塾

が自ら松下村塾に直接の關係を有したるは、僅かに安政三年の七月より安政五年の十二月までにして、即ちその歲月は二年半に過ぎず。而してこの二年半の歲月が、未來に於ける日本の歴史に千波萬濤の激起點となりたるは何ぞや。彼は何を以てかくの如き大感化を及したるか。いはく、その人に在り。いはく、その時勢に在り。いはく、その教育の目的に在り。いはく、その教育の方法に在り。

彼は精を窮め微に入る。白鹿洞の先生に非ず。彼は宇宙を呑み幽明を窮むる。檇欒林の夫子に非ず。彼は僅かに二十七歳の壯者にして、要するにこれ白面の中書生のみ。彼が實力よりも多くの感化を人に及し、彼が人物と匹敵する、或點に於ては寧ろ彼より優れる弟子を出したるは何ぞ。感在知己の一句これを説明して餘りあるべし。

彼は造化兒の手に成りたる精神的爆裂彈なり。一たび物に觸着

(一)南宋の儒者朱
意のこゝ。
(二)ギリシャの哲
學者アラト
ンのこゝ。
白面の書生

(Johann
Heinrich
Pestalozzi,
スキスの教育
家、慈善家。
(西暦一七四
六年—一八二
七年)
精神的の高潮

すれば轟然として火星を飛ばす。この時に於ては物も亦碎け、彼も亦碎く。彼の全體は燃質を以て組織せられたり。火氣に接すれば忽ち焰と爲る。その焰と爲るや銀も鎔かすなり。金も鎔かすなり。瓦も鎔かすなり。彼の人に接するや全心を舉げて接す。彼の人を愛するや全力を舉げて愛す。彼は往々インスピレーションの爲に精神的

高潮に上る。而してこれを以て他に接し、他を導いてこの高潮に接せしむ。知るべし、彼が教育の道多岐なし。たゞ己が眞骨頭、大本領を據べて以て他に及すのみなるを。

彼は變則なるペスタロツチなり。彼は實物教育の大主義を踐行せり。たゞペスタロツチに異なるは、一は天地萬有を以て實物教育の資と爲し、他は活世界の時事を以て實物教育の資と爲したるのみ。その嬰兒の如き赤心を以てその子弟を愛し、自ら彼等の仲間と爲り、彼等の中に住し、彼等の心の中に住するに至りては、二者豈軒

軒
軒

(Johann
Heinrich
Pestalozzi,
スキスの教育
家、慈善家。
(西暦一七四
六年—一八二
七年)

輕あらんや。彼の門人を遇する、一に赤心を以てす。至誠にして動かざるもの未だこれあらず。彼は彼が人に接し物を待つ金誠なり。彼は能く言ふよりも、寧ろ能くこれを行へり。單にこの一點に於ては、東西古今を通じて彼に優る教育家を見出すこと、決して容易の業に非ず。而してこの精神を以てその所信を他に施す。故にその傳道心に至りては、この山を彼處に移すほどの勢力ありしなり。彼が眼中敵もなく、身方もなく、たゞ彼が濟度すべき衆生あるのみ。彼は社會の寵兒に非ず。彼が子弟も亦然りき。彼等は恰も雪を踏んでアルプス嶺を攀づる旅客の如し。その隆凍苦寒を凌がん爲には、互に負戴し、抱擁し、自他の體温に依りてその呼吸を保たざるべからず。艱難は同情を生じ、同情は恩愛を生ず。先生前に倒れて、弟子後に振ふ。彼は知己の感を以てその子弟を陶冶せり。彼は活ける模範と爲りて、子弟に

先だちて難に殉ぜり。否、子弟の爲に難に殉ぜり。この時に於て懦夫と雖もなほ起つべし。況や平生の素養ある者に於てをや。況や恩愛の情、知己の感ある者に於てをや。彼はその子弟に向つて我が如く爲せよといへり。而して爲せり。彼等豈徒然として止まんや。

親思ふこと
親にまさる
親のこゝろ
親の音つけ
親のふと
親の何ん

松陰筆蹟

その時を以てすれば二年半に滿たず。その所を以てすれば萩城の東郊に在る杉氏邸内の八疊の矮屋にして、その特に増築したるものも、別に十疊半の一室を加へたるに過ぎず。しかもこの中より無數の活劇と、活劇を爲せし大立者を出したる所以のもの、豈その由るところなくして然らんや。世或は一人を以て興り、一人を以て亡ぶ。個人の社會に及す勢力も亦輕視すべからざるなり。

吉田松陰

(一)松陰の長妹千代子。この書は安政六年四月十三日萩の野山の獄中で認められたもの。洗米あらつて神様にそなへた米。三日の精進に三日間精進した上で。潔齋心をきよめつ。つしむこと。靈神様。先祖の御靈。連中。同獄の人々をいふ。それをそれと。實通。普門とは觀世音菩薩が普く人々を佛門に引入れる門戸の意。普門品は、この普門の法を明らかにしたものである。念す。念ふ。い。繩目に懸る。繩でしはられ

妹にささぐす 「自修文」 吉田 松陰

この間は御文下され、觀音様の御洗米、三日の精進にて頂き候やうこの御事、御親切の御志感じ入り申候。精進、潔齋などは随分心の固まり候ものにて、宜しき事と存候につき、拙者も二月二十五日より三月晦日まで少々志の候ひて、酒肴など一向食べ申さず候。その間一度靈神様御祭の物項戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にもこれなく、御親切の事に候へば、相果し度存候處、當所にてはあたりまへの精進の外に、又精進と申候ひては、連中又は番人ども、何故と怪しみ尋ね申すべく候につき、それをそれと相答へ候事面倒に存候故、八日は幸ひ精進日なれば、その日一日に頂き申候。

抑、觀音様信仰せよこの事は、定めし禍をよけ候爲なるべく、これには大いに論のある事に候へば、委細申進すべく候。法華經第二十五卷、普門品と申すに、觀音力と申すこと高大に述べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候はば、繩目に懸り候ひても、忽ちぶつくと繩が切れ、人屋に捕はれ候ひても、忽ち錠、錠が外れ、又首の座に直り候ひても、忽ち及が干々に折るゝなど申してこれあり候。

人屋。牢屋。獄。首の座に直る。斬首の座につく。大乘小乗。乗は人を乗せて悟の彼岸に到らしめること。多くは、大乘に達せしめる教。小乗は、少數の教。少根上根。下根は佛法の悟る能力の低いもの。根は、その高ひたもの。ひたす。心に。餘念他慮。ほかのことがへ。退轉す。しりぞいて、むきをかへる。こと。即ちよわりまける意。

り候。これは拙者江戸の人屋にて、この經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれより有難き事はなしとて信仰するも無理はなく候。

さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘、小乗と二つに分ちて、小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乗にては、觀音は右の經文の通りのもので心得、ひたもの信仰せしむる事に御座候。これは人に信を起さる爲なり。信を起すとは、一心に有難い事やこのみ思ひこみ、餘念他慮なき事にて、一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりだせば、何事に臨みても、ちつとも頓着なく、繩目も、人屋も、首の座も平氣になられ候故、世の中にかに難題苦患の來ることも、それに退轉して不忠、不孝、無禮、無道等仕る氣遣はなし。されど初より凡夫に、一心不亂の、不退轉のこ



妹にさとす(自修文)

方便
てだて。手段。

(一)印度のこと。

感
感情。

生老病死
うまれる、お
しぬの四つ。

濟世
世の中をすく
ふこと。
濟度
衆生を苦の世
界からすくつ
て悟の彼岸に
わたすこと。

申し聞かせても、少しも耳に入らぬもの故、かりに観音様をこしらへて信を起させ候教に御座候。これを方便とも申候。

さて又大乘と申す方にては、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申しても、立身出世など申す事には御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひし處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては、我が身もゆくさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては、我が身もゆくさきは死なんかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲を發し、生老病死がこの世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまずと志を立てて、年二十五歳の時位を棄てて山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。さ候ひて、三十出山にて、わづか五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生まれもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出でて、それより世の人を教化せられたり。これが即ち出世法なり。故に、出世せずして濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、即ちこの世の人を濟度する事に御座候。

さてその死なずと申すは、近く申さば、釋迦の、孔子のと申す御方は、今日

まで生きて居らるゝ故、人が尊みもすれば、有難がりもし、恐れもするなり果して死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も、人屋も、首の座も、前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成とか、大石良雄とか申す人々は、及ものに身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刀の千々に折れたる證據なり。

さて又、「禍福は繩の如し。」といふ事を御悟りなるが宜しく候。禍は福の種、福は禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。拙者など、人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなものに候へども、又一方には學問も出來、己の爲、人の爲、後の世へも残り、かつゝ死なぬ人々の仲間入りも出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出で候へば、又いかなる禍の來んも知れ申さず候。勿論その禍の中には又福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし。何の効驗もなき事に、觀音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に、「樂は苦の種、福は禍の本。」と申す事をよくと申し聞かする方が肝要なり。
なほ又一つ、拙者不孝ながら孝に當ることあり。兄弟の中一人にてもふざま

かつゝ
どうかかうか。
やつこ。

所詮
つまることろ。
つまり。

ふざま
運のこと。防
長邊の方言。

受合ふ
せおふ。

勘辨

かんがへわき
まへるこころ

(一)小田村素太郎
松陰の妹壽子
の夫

(二)久坂義助(玄
瑞)松陰の妹
美和子の夫

(三)松陰の手紙を
集めた書物

(四)後醍醐天皇の
第三皇子護良
親王。延暦寺
の大塔に上ら
れたので大塔
の宮といふ。
(五)奈良市外に在
る。
(六)元弘元年九月
三十日

のわろき人あれば、あこの兄弟は自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟睦まじくなるものなり。これより拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受合ふ故、兄弟中は拙者の代りに 父母様へ孝行してくるゝがよし。さすれば、つゞまるこころ兄弟中皆よくなりて、はては父母様の御仕合、又子供が見習ひ候へば、子孫の爲これほごめでたき事はなきにあらずや。よくよく御勘辨候ひて、小田村、久坂なんごへもこの文御見せあるべし。佛法信仰はよき事なれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと、折々御見候へかし。心學本に

のごけさよ願なき身の神まうで

神へ願ふよりは、身に行ふが宜しく候。

(三) 俗簡操輯

七 熊野落

(四) 大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞き召されん爲に、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城すでに落ちて、主上

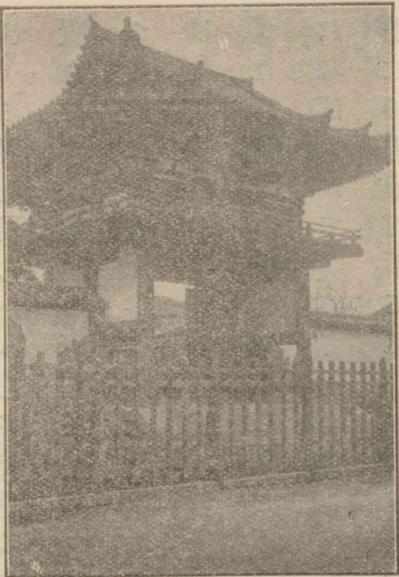
虎の尾を履む
恐

長夜に迷ふ

鶉の床

(一)奈良興福寺の
北に在った同
寺の末寺の一

囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上に迫りて、天地廣しと雖も、御身を隠さるべき所なく、日月明らかなりと雖も、長夜に迷へる心地して、晝



般若寺樓門 (奈良)

は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻にたゞずみて、人を咎むる里の犬に御心を悩まされ、何處とて御心安かるべき所なかりければ、かくて

も暫しはご思し召されけるところに、一乘院の候人按察法眼好專、如何して聞きたりけん、五百餘騎を率ゐて、未明に般若寺へぞ寄せたりける。折節、宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防防ぎて落ち

隱形の呪

させ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく兵すでに寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。さらばよし自害せん。と思し召して、すでにおしはだ脱がせ給ひたりけるが、事かなはざらん期に臨んで腹を切らん事はいと易かるべし。若しやと隠れて見ばや。と思し召しかへして、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり、二つの櫃はいまだ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して、蓋をもせざりけり。この蓋をあけたる櫃の中へ、御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經をひきかづきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されなば、やがて突立てんと思し召して、氷の如くなる刃を抜いて御腹にさし當て、兵、ここにこそ。といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推量るもなほ淺かるべし。

さるほどに兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも残る

これ體

夢に道行く心地

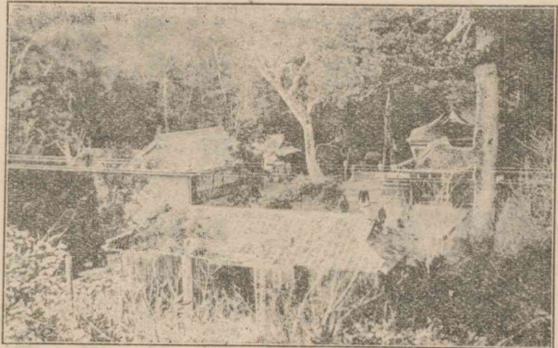
(一)支那唐代の高僧。印度に入り、大部の經文を、持歸り、又それを漢譯した。西曆六四〇年。

冥應
信心肝に銘す

所なく搜しけるが、餘りに索めかねて、これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ。とて、蓋したる櫃二つをあけて御經を取出し、底を翻して見れどもおはせず。蓋あけたる櫃は見るまでもなし。とて、兵皆寺中を出去りぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行く心地して、なほ櫃の中におはしけるが、若し又兵の立歸り委しく搜す事もやあらんずらんと御思案ありて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。

案の如く、兵どもまた佛殿に立歸り、前に蓋のあきたるを見ざりつるがおぼつかなし。とて、御經を皆打移して見けるが、からしと打笑ひて、大般若の櫃の中をよくよく搜したれば、大塔の宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。と戯れければ、兵皆一同に笑ひて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護による命なりと信心肝に銘じ、感涙御袖を濕せり。

(一)紀伊國東牟婁郡三山は本宮新宮那智
(二)大和國吉野郡熊野川の上流



切目神社

奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねてぞ分入らせ給ひける。

その道のほど三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或

ひけり。丹誠無二の御勤、感應なごかあらざらんと、神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に、御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まごろみありける御夢に、鬢結ひたる童子一人来て、熊野三山の間はなほも人の心不和にして、大義成り難し。これより十津川の方へ御渡り候ひて、時の到らんを御待ち候へかし。両所權現より案内者に附進らせられて候へば、御道指南仕るべく候。ご申すこ御覽ぜられて、御夢はすなはち覺めにけり。これ權現の御告なりけり。たのもしく思し召されければ、未明に御よるこびの

高峰の雲に枕を欹つ
岩漏る水に渴を忍ぶ
空翠

は高峰の雲に枕を欹つて、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もこより雨なうして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁、劔に削り、見下せば千丈の碧潭、藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を経させ給へば、御身も草臥れはてて流る、汗水の如く、御足は缺損じて草鞋血に染まれり。御供の人人もその身鐵石にあらざれば、皆饑疲れて、はかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に、十津川にぞ着かせ給ひける。

——太平記——

八 ロンドン塔

夏目漱石

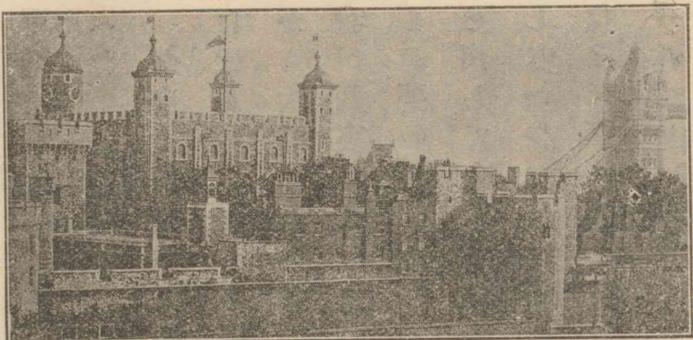
ロンドン塔の歴史は英國の歴史を煎じつめたものである。過去といふ怪しい物を蔽うた帳が自づと裂けて、龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものはロンドン塔である。すべてを葬る「時の流

龕中の幽光
「時」の流

Thames

が逆しまに戻つて、古代の一片が現代に漂ひ來つたとも見るべきはロンドン塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬車、汽車の中に取殘されたのはロンドン塔である。

このロンドン塔を、塔橋の上から、テームス河を隔てて眼の前に望んだ時、余は今の人か、はた古の人かと思ふまで、我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初まはいひながら、物靜かな日である。空は灰汁桶を搔交ぜたやうな色をして、低く塔の上に垂懸つてゐる。壁土を溶かしこんだやうに見えるテームスの流は、波も立てず音もせず、無理やりに動いてゐるかと思はれる。帆掛舟が一隻、塔の下を行く。風のない河をあやつるのだから、不規則な三角形の白い翼が、いつまでも同じ所に停つてゐるやうである。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。たゞ一人の船頭が艫に立つて、艫を漕ぐ。これも殆ど動かない。塔橋の欄干の邊には、白い影がちら／＼する。大方鷗カモであ



らう。見渡した所、すべての物が靜かである。もの憂げに見える。眠つてゐる。皆過去の感じである。さうしてその中に冷然と二十世紀を輕蔑するやうに立つてゐるのが、ロンドン塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴史のある限りは、我のみはかくてあるべしと言はぬばかりに立つてゐる。その偉大なものには、今更のやうに驚かれた。この建築を俗に「塔」と稱へてゐるが、塔といふのは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成立つた大きな地域である。並び聳えてゐる櫓には、圓いもの、角張つたもの、色々な形状はあるが、いづれも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へようと言つてゐる如く見える。

(一) 東京市麴町區

(一) 九段の遊就館を石で造つて二三十並べて、さうしてそれを蟲眼鏡
でのぞいたら、或はこの「塔」に似たものが出來上りはすまいかと考
へた。

(Pepia)

余はまだ眺めてゐるセピア色の水分を以て飽和した空氣の中
に、ぼんやり立つて眺めてゐる。二十世紀のロンドンが、我が心の裏
から次第に消去ると同時に、眼前の塔影が、幻の如き過去の歴史を
我が腦裏にゑがき出して來る。朝起きて啜る瀝茶に立つ烟の、寐足
らぬ夢の尾を曳くやうに感ぜられる。暫くすると、向岸から長い手
を出して余を引張るか、怪しまれて來た。今まで佇立して身動も
しなかつた余は、急に川を渡つて、塔に行きたくなつた。長い手はな
ほなほ強く余を引く。余は忽ち歩を移して、塔橋を渡りかけた。長い
手はぐい／＼牽く。塔橋を渡つてからは、一目散に塔門まで馳着け
た。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は、現世に浮游するこの

一目散

(一) イタリーの詩
人ダンテ作
「神曲」地獄篇
中の句
呵責

小鐵屑を吸収してしまつた。門を入つて振返つた時、

憂(一)の國に行かんとする者はこの門を潜れ。

永劫の呵責に遭はんとする者はこの門を潜れ。

迷惑の人と伍せんとする者はこの門を潜れ。

正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初愛は吾を作る。

我が前に物なし、たゞ無窮あり。我は無窮に忍ぶものなり。

この門を過ぎんとする者は一切の望を捨てよ。

さういふ句がどこに刻んではなにかと思つた。余はこの時すでに

常態を失つてゐる。

空壕にかけてある石橋を渡つて行く、向ふに一つの塔がある。

これは圓形の石造で、石油タンク(二)状をなして、恰も巨人の門柱の如

く、左右に屹立してゐる。その中間を連ねてゐる建物の下を潜つて、

向ふへ抜ける。中塔はこの事である。少し行く、左手に鐘塔が峙

常態を失ふ

(Tank)

無二に鳴らし
無三に鳴らす

つてゐる。眞鐵の楯、黒鐵の甲が野を蔽ふ秋の陽炎の如く見えて、敵遠くより寄するぞ知れば、塔上の鐘を鳴らす。星黒き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て逃れ出る囚人の、逆しまに落す松明の影から闇に消える時も、塔上の鐘を鳴らす。心傲つた市民が、君の政非なりとて、蟻の如く塔下に押寄せてひしめき騒ぐ時も、亦塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。或時は無二に鳴らし、或時は無三に鳴らす。祖來る時は祖を殺しても鳴らし、佛來る時は佛を殺しても鳴らした。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何遍もなく鳴らした鐘は、今いづこへ行つたやら。余が頭をあげて、鳶に古りた櫓を見上げた時は、寂然としてすでに百年の響を収めてゐる。

——淡虚集——

九 樞園文抄

中島 廣足

一 書

暮山霞
山の端はう
づみはれて
つみはれて
霞や鳥のね
らなるら

廣足

散りほふ

夏の日、暮難きをも知らず、冬の夜の長きをも覚えぬは、ふみ見る心の樂しさになんありける。さるは道々しき筋のはさらなり、家にしるせる何くれのふみ、又かりそめの筆すさびなど、唐やまこいにしへ、今こいささまく、多かる中に、わがたてたる筋ならぬも、見もて行くまゝには、えうある事ごもありて、かにかくに飽かず面



中島廣足筆

白く樂しきは、書にしくもの又なかりけり。遠き世のを見るほどは、われもその世にある心地して、やがてその人々を友となしてうち語らふ心地さへせらるゝを、われも筆とりて、よしなし事ごも書きつくるが、たまたまも散りほひ残りて、後の世に傳はらば、今の昔を見るが如く、後の人はたわれを友とせんと思へば、千歳の末にさへ

さは

知る人ある心地して、いごをかしくなん覺ゆる。よろづの心やるわ
ざいごさはなれど、たゞひとりゐて飽かず樂しきは、書の外にまた
何かはあらん、あるが上にもあらまほしきは書なりけり。と、鈴屋翁
のいはれたるは、げにさることこそ。

二 夕

遠山寺の入相の鐘、ねぐらに歸るむら鴉も、いつしか聲しづまり
て、向へる書もやう／＼見えなくなり行くに、面白きわたりは、今しば
しなるものを口惜しく、さうじ引きあくれば、夕月の影かすかに
て、霧たちこめたる梢ごもの、あはれに見やらるゝに、青鷺とかやい
へるが、あやしき聲になきゆくめる、たゞこの上を過ぎぬと覺ゆる
に、幼き兒の遊びゐたる、めのごなどのよぶをもきかぬが、この鳥の
聲におびて、家のうちに走り入りぬめり。道行く人のおこなひも絶
えて、いたう静けきに、ごもし火もてきたることうれしけれ。

おとなひ

さうじ

三 山家の興

くさはひ

山里のすまひはさびしきやうなれど、さるかたになれぬれば、な
かなかにをかしうなん。さるは花もみぢの色香はさらなり、鳥、蟲の
聲につけても、おのづから心をなぐさむるくさはひおほく、松のは
しら、竹のあみ戸、小柴がき、ゆひめぐらしなど、よろづのてうごさへ
いたうこそそぎて、庭などもたゞおのづからなるいはほのたゞず
まひ、軒近くしたゝる水をふる木のうつぼめくもの、にうけためた
る、飯炊ぐにも、手洗ふにも、たゞこの水にて事足りぬ。まれ／＼問ひ
くる人、はたあるじまうけなごいふことこそせず、わらび、つくし、たか
うな、ごころなどの、折にしたがひ所につけたるものして、手づから
かめる白酒すゝめなごす。おなじき物語も人聞きはゞかるべきこ
としなければ、心にのこす隈もなく、ゑひすゝみぬれば、やがてう
ち連れつゝ、たゞさながらなるうちとけ姿にて、そこはかどなくあ

あるじまうけ
たかうな

かむ

さながらなる

(二) 山深くさか
その心はかまふ
さも住まで
あはれはしら
んものかは。
(新古今集 西
行法師)

くがれありきなどするも、住まであはれは、こかいひけんやうに、ま
たなく心ゆきて、いのちも延ぶるやうになん。

一〇 枯野

金屏の松の古びや冬ごもり。 芭蕉
あれ聞けと時雨ふる夜の鐘の聲。 其角
蒲團着て寝たるすがたや東山。 嵐雪

應々といへ
どたくとや
雪の門
去來



賤筆來去

蕭條として石に日の入る枯野かな。 芭蕉 村
ながくと川一筋や雪の原。 凡兆
大根引大根で道ををしへけり。 一茶

一一 芭蕉翁の臨終

(一) 元祿七年(二
三五四年)芭
蕉郷里伊賀へ
の歸途奈良よ
り大阪に至り
花屋仁右衛門
に方の別宅で病
に罹つた。
(二) 芭蕉。
(三) 芭蕉の弟子。

(一) 十月九日。諸子の取りはからひにて、ふるき衣裳又は夜具など
の垢つきたる、不淨なるをよき衣に召更へさせまゐらす。師いはく、
「われ邊地波濤のほごりに、草を敷き石を枕として終るべき身の、か
かる美しき褥の上に、しかも未來までの友ごち賑々しく鬼録に上
らんこと、受生の本望なり。昨夜目のあはざるまゝに、圖らず案じ入
りて、吞舟にかゝせたる、各詠じ給へ。」
(三) 旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

(四) 向井去來。

「枯野をめぐる夢心。」こもし侍り、いづれなるべき。これは辭世にあ
らず、辭世にあらざるにもあらず、病中の心なり。しかしかゝる生死の
一大事を前に置きながら、いかに生涯好みし一風流とはいへ、これ
も妄執の一つこもいふべけん。去來いふ、さにあらず。日々朝雲暮雨

河魚の患
風神の名章
諸門葉

の間もおかず、山水野鳥の上も捨て給はず。心身風雅ならざるなく、かゝる河魚の患につかれ給ひながら、今はのかぎり、その風神の名章を唱へ給ふこと、諸門葉のよろこび、他門の聞え、末代の龜鑑なり。と、洩す、り涙を流す。眼あるものこれを見れば魂を飛ばさんのみ。耳あるものこれを聞かば毛髮これが爲に動かん。列座の面々感慨悲想し、慟絶して聲なし。これ師翁一代遺教經なり。この日より殊更に衰へ給へり。泄瀉せりや度數知れず。去來記

(一)芭蕉の弟子、醫師。

(二)廣瀨氏。惟然坊といふ。

十日。初時雨せり。師、夜の明方より泄瀉度數知れず、一入惱み給へり。木節(一)この日芍薬湯を盛る。諸子うち寄り食事を進め參らせられど、進み給はず。梨の實を望み給ふ。木節堅く制しけれど、頻りに望み給ふ故、止む事を得ず進めければ、一片味はひて止み給ふ。木節いふ、胃受くるころなし。死期近きにあり。と、申の下刻に至つて人心地つき給ふ。けふは一人も食したる者なし。(二)惟然記

(一)武蔵。

(二)内藤丈草。

(三)各務支考。東花坊といふ。

十一日。朝またく時雨す。思ひがけなく東武の其角來る。これは東武の誰彼同伴にて參宮の序、和州、紀州をうちめぐり、泉州より浪華に入りしが、圖らずも師の勞りおはすと聞付け、そこそこ尋ね廻り、やう／＼に駈付けたるなり。すぐに病床に參りて、皮骨連立し給ふ體を見參らせ、且愁へ、且喜ぶ。師も見やり給ひたるまでにて、たゞ／＼涙ぐみ給ふ。其角も言句なくさしうつむきゐたりしを、丈草、去來(三)支考その外の衆次の間に招き、御病症の始終を物語る。この夜、夜すがら伽して、思ひ寄りし事ども物語りゐたるに、うしろより師夢の覺めたる如く粥を望み給ふ。人々うれしさ限りなく、次郎兵衛取計らひて、疾く焚きあげ進め參らす。快く召されけり。朔日より以來の食事なり。土鍋に残りたるを、去來(三)椀に移し入れて押戴き、病中の餘りすゝりて冬ごもり。去來(三)來。去來いふ、趣向は他に求めず、ありあふこと口ずさみて師を慰め

(一)水田正秀、芭蕉の弟子。

參らせん。深く案じ入らず、頓に句作り給へ。惟然(一)は前夜正秀と二人にて、一つの蒲團をひつ張りて被りしに、彼方へ引き、こなたへ引きて終夜寐入らず、はてはしらく、夜明けけるにぞ、その事を互に笑ひあひて、

ひつ張りて蒲團に寒きわらひかな 惟 然

一座これを聞きて、いづれもどつと笑ひければ、師も笑ひ給へり。人々うれしき限りなく、十日以來の興にぞありける。初時雨なりければ、空さく晴れて日影さし入りたるに、蠅多く日南(ひなた)に群りあたり。人々翻(も)もてさし取るに、上手下手あるを見給ひて、暫く興に入り給ひけれど、大病中の事なれば、忽ち倦み給ひ、直ちに寢所に入り給ふ。

鬮(こ)こりて菜飯たゝかす夜寒かな 木 節

うづくまる薬のもこの寒さかな 丈 草

一々惟然吟聲しければ、師、丈草が句を今一度と望み給ひて、丈草

出かされたり。いつ聞きても寂しをり調ひたり。面白し。こしはがれし聲もて譽め給ひにけり。いつに變りし機嫌の麗しきを喜びけるに、木節一人愁をいだけの體に見えければ、其角その故を問ふ。木節いふ、大病中絶食なるに、俄に食の進むことあるは悪病なり、死



(筆山華邊渡) 哲十門蕉

期遠きにあらず。こさは知らず、各さゝめきゐたるに、夜半頃より又寒熱往來ありて、夜あけ頃より顔色土の如くに見え給ひ、暫く悶亂し、人をも見知り給はざりしが、やゝあつて又正氣になり給ひ、左右に舍羅、吞舟、うしろよりは次郎兵衛抱き參らせて介抱し、程なく夜あくれれば十二日なり。かねては閉籠り給ひしが、隔の障子も襖も取

(一)櫻並氏、芭蕉の弟子。

(一)芭蕉の弟子
智月尼の子。

(二)八十村氏
芭蕉の弟子。

(三)法華經第二十
五品觀世音菩
薩普門品。

りはなさせ、其角、去來、丈草をこれへ向ふに見給ひ、穢を憚れば咫尺し給ふな。とこわり、行水を望み給ふ。木節頻りに制しけれど、頻りに望み給ふ故、止むことを得ず湯をひかせ參らせけり。座を靜かに改め、木節が醫術を盡されし事など謝し給ひ、さて三人の者を近く召され、乙州、正秀を左右にし、支考、惟然に筆をこらせ、亡きあこの事こまゝと遺言し給ふ。病苦少しも見え給はず。人々奇異の思をなす。伊賀への遺書は手づから認め給ひ、外に京、江戸、美濃、尾張と洩れざるやうに遺言し終り給ふに、始終は門人中にて筆記す。次第に聲細り、痰喘にて悩み給ひければ、次郎兵衛素湯にて口を潤し參らす。稍あつて去來に向かひ給ひ、路通が數年の薪水の勞、ゆめ／＼忘れ置かず。われ亡きあこにはおよそに見捨て給はず、風流の交し給へ。この事頼み置き侍り。諸國にも傳へ給はれかし。といひ終り給ひて餘言なく、合掌正しく、觀音經と聞えて、微に聞え、息の通ひも遠く



松尾芭蕉

——杉山杉風筆——

なり、申の刻過ぎて埋火の暖ぬくものさむるが如く、次郎兵衛が抱き参ら
せたるに寄掛りて、寐入り給ひぬと思ふほどに、正念にして終に屬
續つづにつき給ひけり。時に元祿七甲戌十月十二日申の中刻、御年五十
一歳なり。(支考記)

—花屋日記—

(一)俳人。名は藤
吉。文學士。東
京の人。

自然禮讚
自然をほめた
たへること。

芭蕉の生活とその俳句〔自修文〕

(一) 荻原井泉水

芭蕉の俳句を見ると、その生活がそつくりそのまゝ出てゐるものが多い。即
ち俳句といふ彼の藝術が、彼の自然禮讚しぜんらいさんの生活とびつたり合致あいちして、隙すまがない。
これは俳句といふものの上で、いや日本の詩といふものの上で、芭蕉に依つて
発見せられた尊い眞理である。芭蕉以前の俳句といふものは、一つの作爲若し
くは機智であつて、面白さうなことを考へ、面白さうにいひこなせばいいことさ
れてゐた。作者自身の生活から句作するなごといふことは、思ひもよらなかつ
たのである。さうした際に、俳句は——詩は——作者の實感から出發せねばな

(一)江戸。今の深川區六間堀町。

らぬ、作者の生活から産みだされねばならぬといふことを實證した芭蕉は、えらいといはねばならぬ。
芭蕉が深川六間堀の小さな草庵に隱栖して、獨り心の中に新しい詩の芽を育んでゐた頃の作、

芭蕉のわきして鹽に雨を聞く夜かな

庭には數株の芭蕉が植ゑてあつたので「芭蕉庵」と稱し、「芭蕉」といふ名もこれから得たといふその草庵は、屋根も傷んで野分の雨が洩るので、鹽を出して雨うけしてゐるわびしい有様が、目に浮かんで來る。秋風がすさまじい勢を以て軒先に迫つて來る、一たまりもなく破れてしまふ芭蕉の傷み易い葉の揉まれる音、ほら／＼と散彈を撃つやうな大粒の雨、その雨がジャ／＼と鹽に落ちる音も聞えるやうだ。部屋の中にじつと耳をすまして大地の音を聽いてゐるやうな作者の淋しい、澄んだ、わびしい心持を中心として、秋の寂しい自然がこの俳句に生きてゐる。

(二)河合氏。

芭蕉庵の近くには彼の門弟の曾良(三)といふものが住んでゐた。朝夕、薪水の勞

を扶けてゐた。或日雪の降る中に、いつもの如く曾良は芭蕉を訪ねて來た。懶い芭蕉は爐に火の消えたのもそのままにしてゐた。

君火たけよき物見せん雪まろげ

雪まろげは雪を丸めて何かの形に造つたものである。二人の親しさ（それは子供のやうな純な感情）が、この俳句の言葉にしみ出てゐる。

曾良の外にも、芭蕉の門人たちは、折々訪ねて來ては庵を賑はした。しかし芭蕉は夜も更けて、獨り自分の影法師より外に人の形のない部屋に物を考へてゐる時などは、さすがに淋しかった。

酒のめばいごねられぬ夜の雪

芭蕉の人間的な感情がよく出てゐる。芭蕉は酒を嗜む方ではないが、全く飲めないのではなかつた。しかし酒の句は甚だ少い。「花にうき世わが酒しろし飯くろし。」といふ句は、深川隱栖以前、江戸市中にゐて困苦を嘗めてゐた時代の作である。門人其角が餘り大酒をするといふので、その健康を氣づかつた餘り「飲酒一枚起請」の文を寫し、

朝がほに我は飯食ふ男かな

の句を副へて、其角の許に送つたこともあつた。大酒をする人にて、世の中が淋しいから盃を手にするのであらう。しかし芭蕉はしづかに醒めて、その淋しさをじつと見据ゑてゐる人であつた。世の人々が生きる爲に競ひ立つて、あわたしく馳せくらべするやうに一生を過すのとは違つて、時といふものが人生を浮かべて、悠久から悠久に流れて行く姿をじつと見すゑてゐる人であつた。

暮おそき四谷すざけり紙草履

さうした静觀の目は、殊に自然の風物に向けられた。多くの人が無感興に見て過ぎてしまふやうな路傍の雑草でも、それを凝視してゐれば、その中に自然の大きな生命が全體的に輝いてゐることを彼は知つた。

よく見ればなづな花さく垣根かな

作者のやはらかい感情が、「おゝここに」と、か弱い齋を抱きかゝへるやうである。そして可憐な齋の鄙びた姿が、芭蕉には、ゑみかけてゐるやうである。これは齋を歌つた句だが、これがそのまゝ、芭蕉自身の生活を歌つたことになつてゐる。

古池や蛙とびこむ水の音

芭蕉の名を知るものは誰も知つてゐるほど人の口に傳へられてゐる作だが、この句でも、芭蕉の生活を背景にしてその味はひが生きて来る。何となく惱ましさを覚えるやうな一日、草庵のあたりには物音といふものが聞えない。すべてのものが、その古池の水のやうに淀んでたゞへてゐる中に、その静寂を破つて作者はたしかに一つの音を聞いた。それは蛙が水にとびこんだといふ些細な地上の一事實だが、この一つの音にも、汎有的な生命のぬきさしのならぬ自然味を感じたのである。地上のすべてのものに悉く神の意志が現れてゐる不思議さを芭蕉は證悟したのである。作者の心持——或大自然の暗示に觸れたやうな一刹那の緊張した心持、その心持を愛惜して、自然の懷につゝましく生きてゐようとする作者の禮讚的な生活——が出てゐるといへよう。

名月や門にさし來る潮がしら

この「門」は人の家の門ともこれようが、やはり芭蕉庵のさゝやかな門口と見

(一)江戸。今の四谷區。

汎有的な生命
宇宙の萬物の
もつ生命のい
さなみ。

禮讚的
大なるもの
の前に感謝し
額つくやうな。

なければ生きて来ない。芭蕉庵は深川の小名木川の邊にあつたので、満潮の時は草庵近く水があげて来たのである。「名月や」といふ詠歎的な言葉は、月の高い無邊際の天空に目を放ちやつた氣持で、その氣持が、ひろくとした潮のゆらめきにこけきつて、又ひた／＼と自分の胸に歸つて来る感情の波動が「門にさし来る潮がしら」と結んだ短い言葉のリズムに表現せられてゐる。この句にゑがかれてゐるものは、月夜の佳景ではない、月に清められてゐる作者のすがすがしい生活そのものである。

上に「芭蕉の生活」といつたが、この言葉は内面的の生活、即ち心の生活といふ意味である。芭蕉は、「佳い生活」即ち心の平和な、感謝に充ちた生活をしようと思へた人である。外面的に、物質的に佳い生活をしようと思つたのではない。かやうな物質的生活に對しては、彼は全く意欲を棄ててゐた。自ら金を得ようと思はず、たゞ弟子たちの報謝するところに依つて貧しく生きてゐられ、ば結構だとした。深川の庵室も一門人から提供してもらつたのであるし、日々の米や鹽も門人の喜捨に任してあつたのである。芭蕉はさうしてこそ、人はほ

〔Rhythm
(韻律)〕

報謝
恩にむくいる
爲におくるこ

んたうに自然の愛を感じ、又人間の愛を感じて生きることが出来ると思つた。生存競争といふいがみあひもなく、常に合掌してゐるやうな有難い心持で生きてゐられると思つた。さうしてこの愛と感謝に充ちた一念が、物に觸れて表現せられる所に、彼の詩、即ち彼の俳句が産まれたのである。

陽炎の我が肩にたつ紙衣かみこかな

自分といふものを自然の光明の中に置いて、その光明をしみ／＼と暖く心の中に感受してゐる心持が生きてゐるではないか。かやうな専念的な、中核的な心持を表現するには、極めて單純な、原始的な、簡素な、しかも凝聚的な強い響を持つた言葉でなければならぬ。そこに芭蕉は「俳句」といふ十七字の詩形を見出したのである。されば芭蕉は、自分の生活を以て、俳句といふ藝術をいかけたのである。又俳句といふ藝術が、かやうな生活の心境を歌ふ爲に、二つなきものであつたのである。芭蕉の生活と俳句は、びつたりと一つに合つてゐて、その間に少しの隙もないのである。

—— 古人を説く ——

中核的
物の心髓に徹
つた。
凝聚的
物のいいさ
るばかりを證
じつめた。

二二 光頼参内

さるほごに内裏には、同(一)十九日公卿僉議(二)にて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、このほごは信頼卿の舉動過分なりとて、不参にておはしましけるが、参内して承らんとして、殊にあざやかに束帯引きつくるひ、蒔繪の細太刀をおこなしやかに佩き給ひ、傳子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雑色の装束にいでた、せ、自然の事もあらば人手に懸くな。汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ。とて、御身近く置き、そのほか清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて所々門々を固く守護しけるを事もせず、先高らかに追はせて入り給へば、兵ごも大いに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。

紫宸殿の後を経て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その

(一)平治元年十二月十九日。
 僉議
 (二)藤原頼朝の子、權大納言正二位に進み、桂大納言といつた。承安四年(一八三四年)薨、年五十一。
 (三)藤原信頼、光頼の甥。
 雑色
 自然の事

上臈

(一)藤原頼朝の子、從二位權中納言となつた。
 宰相

しごけなう
 色代す



圖の帯

座の上臈たち皆下にぞ着かれたる。光頼卿、こは不思議の事かな。人はいかにふるまふごも、彼は右衛門督、我は左衛門督なれば、下には着くまじきものを。と思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、けふの御座席こそ世にしごけなう見え候へ。と色代して、むづくと歩み、信頼卿の上にむづこ着き給ふ。光頼卿は信頼卿の爲には母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿あななさましと見給ふに、光頼卿下襲の裾引直し、衣紋つくるひ、笏取直し、

氣色して

氣色して、けふは衛府督が一座するご見えて候。召に參ぜざらんものをば、死罪に行はるべしとやらん承りて參内するごころなり。抑、何事の御詮ぞ。ご問ひけれども、信賴卿物も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て光賴卿ついで立ちて、悪しう參つて候ひけり。ごて、靜々ご歩み出でられけり。

大剛の人

庭上に充ち満ちたる兵ごもこれを見奉りて、あはれ、この殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしまさざりつるに、仕出したる事よ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戦せば、いかばかりか頼もしからん。ご申せば、傍なる者、昔頼光、頼信とて源氏の名將おはしましき。その頼光を打返して光賴ご名のり給へば、これも剛にましますぞかし。ごいへば、又傍より、なぞ、その頼信を打返して信賴ご付き給ふ右衛門督殿は、

(一)源満仲の子。大江山の山賊退治を以て特有名である。
(二)頼光の弟、平忠常の亂を平げた。

壁に耳天に口

あれほど臆病にはおはしますぞ。ごいへば、壁に耳、天に口ごいふ事あり。怖し〜、聞かじ。ごいひながら、皆忍笑に笑ひけり。

(一)藤原惟方、檢非違使別當

有職

光賴卿かやうにふるまひ給へども、急ぎでも出でられず、殿上の小部の前、見參の板高らかに踏鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしけるを招き寄せ宣ひけるは、公卿僉議にて催されつる間參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらん、光賴も死罪に行はるべき人數にてあなり。傳へ承る如きは、その人皆當時の有職、然るべき人ごもなり。その中に入らんご甚だ面目なるべし。さても先日右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢の爲に、神樂岡へ向かはれけるごは、いか(二)に以ての外然るべからざるふるまひかな。近衛大將檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職にゐながら、人の車の尻に乗り給ふご、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに耻辱なり。就中首實檢は甚

(二)藤原通憲入道、信西
(三)京都の東北部

天氣

曩祖

(一)勸修寺内大臣
高藤

(二)三條右大臣定
方、高藤の子

さしもごかる

時刻をや廻ら
すべき

だ穩便ならず。と宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかば。とて、赤面せられけり。

光頼卿重ねて、こはいかに勅諭なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖、勸修寺内大臣、三條右大臣が延喜の聖代に仕へてより以來、君すでに十九代、臣亦十一代、承り行ふことは皆これ徳政なり、一度も悪事に從はず。當家はさせる英雄にはあられども、偏に有道の臣に伴なうて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもごかる、まほごの事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳上るなるが、和泉、紀伊國、伊賀、伊勢の家人等待受けて、大勢にてあなり。信頼卿が語らふところの兵若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。若し又火などを懸けなば、君もいかでか

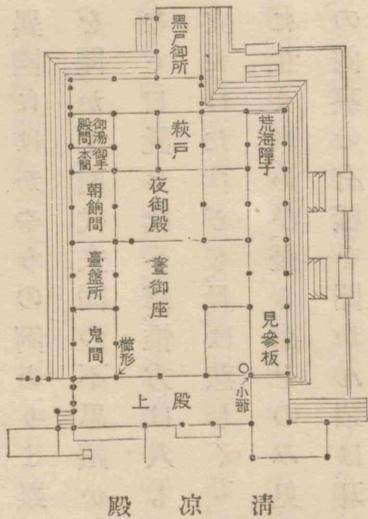
相構へて

(一)一條天皇

(二)後白河上皇

内侍所

かけるふ



安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらん。だにも、朝家の御歎なるべし。いかに況や君臣ともに自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、この時に在るべきをや。右衛門督は御邊に大小事を申し合はすこと聞ゆれ。相構へて相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。黒戸の御所に。上皇は。一本御書所に。内侍所は。温明殿に。劍璽は何處に。

夜の御殿に。と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

又「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、それには右衛門督住み候へば、その方様の女房などぞかげる

かくござんな

参らせたなり

のろくしげ

宿業

(一)支那古代の隠者。堯の天下を彼に譲らんとするや、これを聞き耳が汚れたとて額水に洗つた。

ひ候らん。ご申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今ばかりござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸御所に遷し参らせたなり。末代なれども、さすが日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は王法を如何守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例あり。雖も、我が朝には未だかくの如き先蹤を聞かず、前代未聞の不思議かな。さて、のろくしげに憚るところなく口説き給へば、惟方は人もや聞くらん。よにすさまじげにて立たれたれども、且は悲しくて、我いかなる宿業に依つて、かゝる世に生まれあひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。さて、袍の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみては、打萎れてぞ出で給ひける。

——平治物語——

一三 待賢門の戦 その一

大内へ向かふ人々には、大將軍は左衛門佐重盛、(一)三河守頼盛、(二)淡路守教盛、侍には筑後守家貞、子息左衛門尉貞能、主馬判官盛國、子息右衛門尉盛俊、與三左衛門尉景安、進藤左衛門家泰、難波次郎經房、瀬尾太郎兼康、伊藤武者景綱、館太郎貞康、同じき十郎貞康を始として、都合その勢三千餘騎、六波羅を打出で、賀茂河を馳渡し、西の河原に控へたり。

左衛門佐重盛は生年二十三、けふの軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に櫛もみの匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締め、小鳥といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、滋籐の弓持ちて、黄桃花毛なる馬に、柳櫻摺つたる貝鞍置かせて乗り給へり。重盛のたまひけるは、年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應

(一)平清盛の長子
(二)平忠盛の第五子、清盛の弟
(三)清盛の弟

花洛

(一)漢の高祖の臣、
猛勇を以て有
名である。
(二)同、智謀を以
て名がある。

せり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。誰かここに樊噲、張良が勇
をなさざらん。さて、三千騎を三手に分つて、近衛、中御門、大炊御門、大
宮表へ打出で、陽明待賢、郁芳門へ押寄せたり。
大内には南、西、北の三方の門をさし固め、東表をば開かれたり。承
明、建禮の脇の小門をもこもに開きて、大庭には馬ごも多く引立て
たり。梅壺、桐壺、紫宸殿の前後まで兵ひしこなみゐたり。これ皆源氏
の勢なれば、白旗二十餘流打立つたり。大宮表には平家の赤旗三十
餘流さし揚げて、勇み進める三千餘騎一度に関をどつと作りけれ
ば、大内も響き渡りて夥し。
関の聲に驚いて、たゞ今までゆゝしく見えられつる信賴卿、顔色
變りて草葉の如くにて南階を下られけるが、膝戦いて下りかねた
り。人なみ〜に馬に乘らんと引寄せさせたれども、太りせめたる
大の男の、大鎧は着たり、馬は大きなり、乗煩ふ上、主の心には似も似

(一)周の穆王が八
匹の駿馬を驅
つて天下を周
遊した故事。

ず、逸り切つたる逸物なれば、つと出でん、つと出でんとしけるを、舍
路大條一 上親町 土御門 近衛 中御門 大炊御門 冷泉 路大條二 大宮大路

圖 裏内 侍二人つと寄つて、疾く召し給へ。さて
押上げたり。餘りに押したりけん、弓手
の方へ乗りこして、伏しざまにござ落つ。急ぎ引起して見れば、顔

大つて馬を抱
内へたり。放た
裏ば天へも飛
圖 びぬべし。穆
(一) 王八匹の天
馬の駒もか
くやと覺ゆ

に砂ひしと付き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日ごろは大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、あの信賴といふ不覺人は臆したりな。とて、目華門を打出でて郁芳門へ向かはれければ、信賴も鼻血押拭ひ、さかくして馬に搔乗せられ、待賢門へ向かはれけるが、物の用にあふべしとも見えざりけり。

左衛門佐重盛五百餘騎をば大宮表に残し置き、五百餘騎にて押寄せて、呼ばはり給ひけるは、この門の大將軍は信賴卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔ウヰノ太宰大貳清盛が嫡子左衛門佐重盛、生年二十二、と名のり懸ければ、信賴返事にも及ばず、それ防げ侍ごも、とて引退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし、我先にと逃げければ、重盛愈勇みて、大庭の棟の木の下まで攻めついたり。義朝これを見て、惡源太はなきか。信賴といふ大臆病人が、待賢門をはや破られつるぞや。あの敵追出せ、と宣ひければ、承り候。とて駈けら

僻目

苗裔

(一)源義平の長子、義朝

(一)武藏國比企郡菅谷村。

見參す

端武者

れたり。續く兵には鎌田兵衛、後藤兵衛、佐々木源三、波多次郎、三浦荒次郎、須藤刑部、長井齋藤別當、岡部六彌太、猪俣小平六、熊谷次郎、平山武者所、金子十郎、足立右馬允、上總介八郎、關次郎、片桐小八郎、大夫以上十七騎、轡を並べて馳向かふ。大音聲を揚げて、この手の大將は誰人ぞ。名のれ聞かん。かく申すは清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子、鎌倉惡源太義平と申すものなり。生年十五歳、武藏の大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしよりこの方、度々の合戦に一度も不覺の名をこらず。年つもつて十九歳、見參せん。とて、五百騎の真中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、豎ざま横ざま十文字に敵をさつと蹴散らして、端武者ごもには目な懸ける。大將軍を組んで撃て、櫛の匂の鎧に蝶の裾金物打つて、黄桃花毛の馬に乗つたるこそ重盛よ、押しならべて組んで落ち、手捕にせよ。と下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ごも、與三左

衛門、進藤左衛門を始として百騎ばかりが、中にぞ隔りける。悪源太
を始として十七騎の兵ども、大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木を
中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追廻して、組まん組まん
とぞ揉うだりける。十七騎に駈けたてられて、五百餘騎かなはじこ
や思ひけん、大宮表へさつと引く。

一四 待賢門の戦 その二

大將左衛門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふところに、筑後
守つと参りて、曩祖平將軍の二たび生まれ替り給へる君かな。と向
かふさまに譽め奉れば、今一度駈けて家貞に見せんと思はれけ
ん、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、又大庭の
椋の木まで攻寄せたり。又悪源太駈向かひ、見まはしていひけるは、
「たゞ今向かひたるは皆新手の兵なり。但し大將は、もこの大將重盛

(平貞盛)

ぞ。以前こそ洩らすとも、今度に於ては餘すまじ、押並べて組んで捕



下知

れ、兵ども。と下知すれば、勇みに勇みた
る十七騎、我先にと進みければ、今度は
難波次郎、同じき三郎、瀬尾太郎、伊藤武
者を始として、百餘騎が中に隔てたる
に事ともせず、悪源太弓をば小脇にか
い挟み、鎧踏張り突立ち上り、左右の手
を擧げ、幸に義平源氏の嫡々なり。御邊
も平氏の嫡々なり。敵には誰か嫌はん。
寄れや、組まん。といふまゝに、先の如く
大庭の椋の木の下に追廻して、五六度
までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん、又大
宮表へ引いて出づ。悪源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬

に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、汝が不覺に防げばこそ敵度々駈入るらめ。あれ速に追出せ。といひ遣はされければ、俊綱馳せてこの由をいふに、承り候。進めや、ものごも。さて、色もかはらぬ十七騎、大宮表に駈出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を束へ引きければ、我が子ながらも義平はよく駈けたるかな。あ、駈けたり。とぞ譽められける。

大將重盛、與三左衛門景安、進藤左衛門家泰、主従三騎かけ放れ、二條を束へ引かれければ、惡源太、鎌田にきつと目合はせて、ここに落つるは大將とこそ見れ。返せや。とて追つかけたり。すでに堀川にて追つつめけるが、弓手の方に材木多く充ち満ちたるに、惡源太の乗り給へる馬かたなづけの駒にて、材木にや驚きけん、馬手の方へけし飛んで、小膝を折つて、どうと伏す。鎌田兵衛延ばさじと、十三束取

かたなづけ
けし飛ぶ

つて交ひ、よつ引いてひやうと射る。重盛の射向の袖にはたご中りて飛返る。やがて二の矢を射たりければ、押附にちやうと中りて、籠かづき碎けて跳り返れり。惡源太、これは聞ゆる唐皮といふ鎧ござんなれ。馬を射て、落ちんごころを撃て。と下知せられければ、又よつ引いて追ひざまに、筈の隠るゝほど射こみたり。馬は屏風を返す如く倒るれば、材木の上に跳落され、兜も落ちて、大童になり給ふ。鎌田堀川を馳越えて、重盛に組まんご落合ふ。重盛近づけてはかなはじごや思はれけん、弓の弾にて鎌田が兜の鉢をちやうと突く。突かれてゆらふる間に、兜を取つて打着つゝ、緒を強くこそ締められけれ。與三左衛門馳寄つて中に隔り、申しけるは、漢の紀信は高祖の命に代りて滎陽の圍を出し、遂に天下を保たせき。主辱しめらるゝ時は臣死す。といふに非ずや。景安ここに在り、寄れや、組まん。といふまに、鎌田兵衛ご引組んで取つて押へけるごころに、惡源太馬を引

起し、これも堀川を馳越えて、重盛に組まんごこんで懸りけるが、鎌田をや助くる。大將をや撃たんと。思案しけれども、大將には又も寄せあふべし。政家を撃たせてはかなはじ。と思ひ、與三左衛門に落合うて、三刀刺して首を取る。重盛は、頼み切つたる景安撃たせて、命生きて何かせん。とて、すでに悪源太と組まんごせられけるを、進藤左衛門馳來り、家泰が候はざらん所にてこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれ。とて、我が馬を引向け、中に隔てて悪源太とむざ組む。政家は重盛に組まんごしけるが、主を撃たせてはかなはじ。と思ひければ、進藤左衛門に落重つて、首を搔く。この間に重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば、助り難き命なり。

十二月二十七日の巳の刻ばかりのことなるに、一むら雨さつとして、風は烈しく吹きたりけり。鎌田が鞍の前輪にも氷柱いたれば

手形

乗りかねたり。悪源太これを見給ひて、手形をつけて乗れや。と宣ひければ、打物抜いて、つぶ／＼と手形を切つてぞ乗りたりける。鞍に手形をつくること、この時よりぞはじまれる。——平治物語——

一五 眞夜中から黎明まで

豊島與志雄

正子

時の區劃からいへば、正子は一日と次の日の境界であるけれども、徹夜する者にとつては、この境界は全く感じられない。彼にとつては、午前二時頃までは前夜の連続である。遠い汽笛の音、空氣の亂れ、何かしら動いてゐるもののごよめき、一日の生活の餘喘……それ等のものが大氣中に漂つてゐる。試に戶外へ出て見よ。星の光はまだ人に親みの色を帯びて居り、街路の空氣には人の息が混つてゐる。歸り後れて飄々乎たる人影が、犬ごとも散在してゐる。そして午前二時頃から、深い沈黙と睡眠が萬象の上に重くのし

餘喘

超自然的

かゝつて来る。すべて夜を徹する人々が——遊戯に心奪はれてゐる者や、仕事に縛られてゐる者などを除いて——何さなく起きてゐるのを堪難く感じだすのはこの時である。四五の友人相集つて談笑してゐるうちにも、ふと言葉が途切れ心が沈んで、薄暗い影に鎖されるのはこの時である。地上のあらゆる物が鳴りを潜め息を凝らして、石のやうに冷たく固く沈黙してしまひ、空氣が重々しく淀んで來、星の光が空の奥深く潜んで行く。そしてこの死のやうな靜寂のうちに、天と地に跨がる大きな影が垂れこめて、月のある夜は月の光を、月のない夜は夜の闇を、嵐の夜はその雨風を、超自然的な帷のうちに抱きすくめる。その帷の襞や裾の奥から、無數の神秘的な眼がじつと覗きだす。すべて物陰に潜んでゐるもの、人の眼につかないもの、形も色も音もない幽鬼の氣、この世のものでないものが、空に地に浮動し彷徨する。しかもそれはたゞ魂に感ぜられるだ

對稱

蠱惑的

けで、そこから來る魂のおびえも手傳つて、官能の對稱たる沈黙と靜寂は、層々として積重つた深みを倍加する。地上の生ある物皆は、人も、獸も、草も、木も、さういふ深みの底に沈み溺れて、蠱惑的な窒息に眠り入る。それはまさしく寂滅の時、逢魔の時、呪咀の時、丑時參の時刻である。露や霜もおりるを止める。時間も歩みを止める。死と神秘の時間である。たゞ時計の針の止らないのが不思議である。そして冬ならば四時頃、夏ならば三時頃、突然或物音が響く。身ぶるひに似た木の葉のそよぎ、ぼうと尻ぎれの汽笛の音、無意識的な犬の遠吠、又は何物とも知れぬ擾音、それ等の一つが不意にどこからともなく起つて來る。それが合圖である。沈黙と魔眼の底に凝固つてゐた萬象が、一齊にぞつと寒氣立つて來る。星の光がぎら／＼とした凄みを帯びる。月の面がまざ／＼と研澄まされる。或は濃く淀んだ闇がむく／＼と動き出す。空氣が恐しい勢で徐々に流れ出

す。或は風の方向が一息に變る。そして地上のあらゆるものが、震へながら肩を聳す。無生のものが生の息吹に觸れて、恐れ戦くに似てゐる。かく天地萬象が寒氣立つころにも、蠱惑的な鬼氣は物の深みに姿を潜めてしまふ。それはたゞ物凄い時刻、まだ形を具へない恐怖と歡喜の渾沌たる時刻である。復活の戦きの時である。

その戦慄が暫く續くうちに、ふつと、全く何故ともなく、すべてが消去る空虚の時が来る。眼覺めながら息を潜めた時刻である。萬象がむく／＼と起上りかけて、又そろりこやる時刻である。もはやそこには生も死も何物もない。日や星の光もぼやけ、闇の黒さも艶を失ひ、大地の上を押渡る微風も息をつき、あらゆる物音が消失せる。萬象の律動がびたり合つたその隙間である。徹夜の者が最もひどい打撃を感じるのは、この時刻に於てである。はや口を利くことも、仕事を續けることも、起きてゐることまでが、堪難い努力となる。天

交響樂

地がほつと眼覺の息を吐盡して、何故ともないためらひのうちに、再び息を吸ひこみかねてゐる、全く空虚なあひまである。そして俄に輝かしい、しかもまだほのかな交響樂がどこもなく起つて来る。空には星の囁、地上には遠く應へ合ふ反響、そして一際高く鶏の聲、車の響、汽笛の音、それ等の底に籠つてゐる人聲。一時のそろりとした假睡からはつと眼覺めて起上る萬象の寢間着の衣ずれの音である。ほの暗い夢を輝かしい幻が入代る氣配である。新に立上つて来るその幻は、物の隅々まで訪れて、すべての閉ぢてゐる眼を見開かせる。爽やかな空氣が空に地に流れる。草木の葉末には露や霜が繁く結ばれる。夜を徹してゐる者は、じつと座について居れなくなつて、故もなく立上つて歩きだす。そして試に窓を開けば、東の空にはうつすらと紫の色が流れてゐて、それが見る／＼うちに紅色を帯びて来るころにも、遠く聞えてゐたほのかな擾音が、い

つしか騒然たる反響に高まつて來て、人の足音、小鳥の歌、星の最後の閃、そして地上の萬物が、ほの白い明るみのうちに形を浮出して、その上を、觸れなばさら／＼と音を立てさうな爽やかな空氣が、夜の闇と夢を運んで流れて行く。立並んだ人家はまだ黙々と眠つてゐるけれど、その中に在るものは、もはや夜の夢ではなくて、新たな一日の幻影である。空には清い目の光が放射し、地上には輝かしい生活が始められてゐる。

冬の風物 「自修文」

佐々木信綱

冬は草木も枯れ、天地の眺も荒れすさむ時であるから、歌に詠むやうな風物も、春や秋のやうに多くはない。しかし歌は單に美しいものや、花やかなもののみを詠むものではなく、普通の目には氣がつかないやうなところにあはれを求め、美をさぐるのが、歌を詠む人の本分である。この立場で見ると、冬の自

然はその荒涼たるところに又その美しさがある。殊に冬の風物の中にも、他の時節には見られない美しい趣のあるものがある。即ち時雨とか、霜とか、雪とかいふものは、いづれも冬の寒い時候の産物で、春や秋の花や紅葉にも劣らぬ趣を折々見せるものである。時雨といふものは、冬の初に折々降つて來る雨で、日が照つてゐるのに、急に薄く曇つて來て降つて來る趣は、夕立に似て夕立のやうな激しさがなく、何となく優しい美しい趣のあるものである。この時雨の眞の趣は、武藏野に建てられた都會よりも、三方に山をめぐらしてゐる京都にある。随つて眞の時雨の美しさを詠んだ歌は、江戸の歌人のよりは、京都の歌人の作に多い。東山の麓なる岡崎に住んでゐた香川景樹には、

音羽の山ぞ見えずなりゆく

さいふのがある。音羽の山は有名な清水觀音のあるうしろの山、粟田山はその北に連つてゐる山である。浮雲のは、淡くさいふ意味から粟田にかけて、枕詞のやうに用ひたのである。こちらから見てゐると、目の前の音羽の山が曇つて、

(一) 千々 通舎と號する。權中將正三位に進入だ。安政元年(一八五四年)歿、年六十二。

見る／＼隠れて行く。思ふに粟田山の奥は時雨れてゐるのであらうといふ意である。同じく京都に住んだ公卿の歌人千種有功の作に、

北山の炭もてはこぶ都路に

しぐれの雲もおくれざりけり

北山から炭を運んで来る京都への街道に、その炭の荷にこもなつて、時雨がふりそゞいで来るこよといふので、北山から京都へ炭を送つて来る道に、時雨のさこふりそゞ趣ある景色が、繪のやうに詠まれてゐる。

景樹の弟子なる木下幸文の作に、

こま舟の上には月のさしながら

時雨ふるなりひら方のさこ

こま舟の上には月のさしながら、時雨ふるなりひら方のさこといふのがある。枚方は淀川の岸で、京都から大阪への夜舟の舟つきである。歌の意味は明瞭で、そこに泊つてゐる苦舟の上に、月の光がさしながら時雨がうちそゞこいふ、ありのまゝの景色を歌つたのである。夜でも晝でも空の光はそのまゝで、ここかひこ所薄曇して、はら／＼と降りそゞこいふのが、時

とま舟 さまをかけた舟の屋根をおほふむしろ。さばこいふ。(二) 河内國北河内郡。徳川時代ここに監船所を置いて、伏見、大阪間の航漕を掌らしめた。

雨獨得の趣である。

次に霜も亦荒涼たるうちに一種の趣あるもの。木の葉に白くおいたのも、路の上を色ごつたのも、こり／＼に面白い。

こけ霜のいまだかわかぬ草の上に

けふものごけき朝日かげかな

これは熊谷直好の作。霜ごけがして、まだ乾ききらない草の上に、けふも亦のごかな朝日の光が照添ふこよといふのである。日かげのうら／＼かな小春日和の美しさは格別なものである。この歌はその趣を詠んだので、けふもこいふところに、連日の小春日和こいふころが現れてゐる。

山がつが煙ふきけんあさならし

つばきのまき葉霜にこほれり

これは和歌山に住んだ加納諸平が、藩侯の命で紀伊國續風土記を撰すべく、實地踏査に熊野の奥へものした折の作。椿の葉をまいて烟草をのむこいふ山間の古俗を詠んだのが、かはつてゐる。

(一) 景樹の高弟。周防岩國の人。大阪に住んだ。文久二年(一八五二年)歿、年八十一。

(二) 醫者兼學者。又歌をよくした。徳川家の臣。安政四年(一八五七年)歿、年五十二。

朝日かげまだよくさゝで大船の

かげの小舟にのこるはつ霜

これは大隈言道こまみちの作。言道は福岡から大阪に上るごと瀨戸内海を往復し、その時の作が少くない。これもその一つである。朝日の光がまだよくさゝないの
で、大船のかげになつてゐる小舟の上に、初霜が消えかねて残つてゐるこいふ
ので、大船のかげの小舟こいふ着眼に、言道らしい面白さがある。

終りに、雪に至つては、まことに冬の花こいふべきもので、野山にも、町
中にも、又河邊にも、眞白に降積んだ景色は、いふばかりなく清く美しい。隨
つて雪の歌は古來極めて多い。殆ど冬の歌の大半は雪の歌であるこいつてよい
くらゐである。ここには特に萬葉集のうちから數首を選んで述べよう。

ふる雪の白かみまでに大君に

仕へまつれば尊くもあるか

これは天平十八年の正月、左大臣橘諸兄もろえ以下諸公卿が、太上天皇たじょうてんなる元明天
皇の御所にまゐつて、雪見の御宴に侍した時、勅命によつて詠んだ歌の一つで、

太上天皇
位をゆつられ
た後の天皇の
尊稱、太上天
皇とも略して
上皇ともいふ。

しくれ日
いこまか
らき見つ
行く萬葉
もふみけ
みちを
信綱

諸兄の作である。歌の意は、降る雪の如く眞白な白髪かみとなるまで、天皇陛下に
仕へ奉つて、かく面白い雪の日の宴にも列り奉ることを思ふと、御いつくしみ
の有難さが、尊くも思はれることかなこいふ意。たふさくもあるかのかは、哉
こ同じ意。時に應じて、老臣の誠忠の心を述べ奉つた作である。

山のかひそこも見えずをこゝひも

きのふもけふも雪の降れば



筆綱信木々佐

同じ時、紀男梶きのおとの作。山のかひは山と山の間まの意。一昨日も昨日も今日も連
日雪の降つた爲に、山のはざまもそこわからないまで、雪が降りうづんだこ
こであるの意。雪の日の眺望をそのまゝに詠んだ作。

大宮の内にも外にもひかるまで

ふれる白雪みれごあかぬかも

同じ時、大伴家持の詠んだ作。御所の内外一面に、光りわたるまで降つた白雪の美しさは、見ても見ても見飽きのしない美しさかなの意。尊い大内山の内外をこめて、眞白な雪が降りうづんだ景色が、いかにも清淨な感を與へる。ひかるまでの一句も、極めてよくきいてゐる。

—和歌百話—

一六 日出觀

遅塚麗水

ほのくゞと鶴を夢みて明けの春

縹渺として嫩い春は來た。靜かに衣裳をこゝのへて年の始の庭に降立ち、まづ惠方に當る井の華を汲來つて、若水に身を淨める。まだ明けやらぬ初空に星は冴えて、門巷一路、松竹相對す。實にや春立つや星の中から松の色

(一)尾崎紅葉の句
惠方
(二)鬼貫の句

修羅の巷の疇昔の夜はごこへ行つた。この曉の靜けさは、神代に生

まれて來たかごばかり思はれる。若水に身を淨めてから、靜かに東の方に向かつて、初日の昇るを待つ。

(一)曾良の句

ほのくゞと鴉黒むや窓の春

常の朝に聞く鴉の啼く音も、けふばかりは初鴉の名に愛てられる晴れた初空。

(二)一茶の句

元日や上々吉の淺葱空

淺葱の色に冴えた東の空から、杲々として昇る初日の出。

(三)希因の句

春立つや氷柱の銚の雫より

初日影は燦として軒端の氷柱を射る。氷柱の先から垂れる雫は、瑠璃を生み、珊瑚を生み、瑤瑤を生み、紅玉を生み、夜光珠を生む。やがて

(四)風朗の句

大空をせましと句ふ初日影

靈光天地に充ち満ちて、四海の春なる。掌を合はせてをろがむ人の、再々として飛ぶ恒河沙の初日の影の靈光を浴びて、誰かは無上

の歡喜を覺えないものがあらう。

二

日の出は海洋上から観るのが最も好い。水天に粘く一線の邊に、日輪まづ半規を露すの時、その色や渥丹、眼を見はつて見つめても、まじろぎもしない。やがて次第に昇る時、光彩は漸く陸離と輝き始めても、まだ瞳子を射るには至らない。圓なるべきはずの日輪が、波瀾の盪揺と空氣の屈折に由つて、さながら閻浮檀金の大日如來の像のやうに、楕圓に見えるのも少時の間で、忽ち紫金の妙光を放つて、海を蹴つて跳ると見れば、はや一竿の高さに昇つてゐる。繪に看る日の出はそれである。濱の松、白沙の磯、そこに尉と姥を點出し、更に一雙の海鶴を添ふ。古來凡百の畫家のゑがき成すところ、皆一様な構圖であるが、誠に洋々たる太平の象を表してゐる。

次に日の出を観るのに好いのは高山の上である。人間の夜はま

盪揺
閻浮檀金

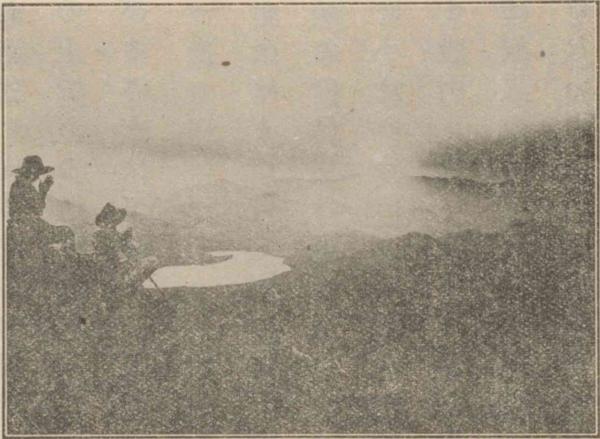
一竿の高さ

だ明けない時、獨り天外の最初の曙光に接する。正しく一世を鷹視し、百代に虎歩するの概がある。次に日の出を観るに好いのは、曠野の上である。遙林、遠阜、そこに散在する水村山郭の、綺錯して目に媚びるさまは、又晴やかな觀である。

三

余はまづ曾て觀た富士山上の日出を憶ふ。

余の最初の富士登山は、一歳の夏の眞中の頃であつた。常の單衣に小倉の袴、頂上の寒さを凌ぐ料として、たゞ一枚の莫大小襯衣と股引を携へたのみである。血氣の齡とはいひながら、今から思へば無謀の至であつた。御殿場の宿屋に同宿の人たちは、夜のまだ明けない中に、馬よ強力よと罵りわめいて出立つたが、余は家に居る時と變らず朝寐して、午餉の團飯、換草鞋を腰に佩び、絲經を肩から掛けて、強力も履はずにたゞ一人、草いきれの裾野をたどり、やがて



富士山上の日の出

山に入つてからは、捨草鞋を道しるべに登り登つて、折からの三日の月を袖の陰に眺め、満天の星を帽子の眉廂近く望んで、夕暮の山路に迷ひながら、辛くも六合目の石室にたどりつき、乾魚と豆腐汁で夜食を認め、襦袢を借りて、一夜を石室の爐畔に過した。

そのあくる朝主人に喚起されて、朱鏘のした小さなブリキの金盃に雪水をもらひ受け、式ばかりの盥漱をして、日の出を待った。

「お山は晴天。日本晴の御來迎が拜まれますぞ。」

主人はいつた。私は襦袢を被つて、主人の後について石室の外へ出

炬火
天涯地角

猩々緋

た。
下界はまだ夜である。昏い東の方は稍紫に明け始めた。たゞ見る、その紫がほんのりと薔薇色に紅くなつた。瞳を凝らして視つめてゐると、遽に炬火のやうなものが朱の色に燃えて、遙かの遙かの天涯地角に揺いでゐる。石室の主人は掌を合はせて、六根清淨を唱へだした。

炬火のやうな靈光がやがて見えなくなる。と、渾沌たる冥中に、五彩の龍文が現れて渦を卷く。それが見る／＼鮮な色を呈して來て、はては猩々緋のやうに眞紅になつた。ふとそこにさながら二つの黄子をもつ鶏卵のやうな銅色の圓いものが並んで浮いた。見る見る銀の色に變つて來る。紫金の色がその周圍からちら／＼射す。それが段々白く熾けた鐵の丸のやうになつて、電氣扇が舞ふやうに、非常な疾さで廻轉し始める。忽ち眼には見えない巨きな鐵鎚が、そ

の白熾の大鐵丸を打ちひしやいだかと思ふ刹那に、大光明は颯とばかり又四方を射、溟中にさよむ猩々緋の電氣は、この時俄に逆立つて頽れると見れば、太陽は躍如としてはや地角を離れてゐた。

四

日出づる方のひんがし、その東は「日」の字と「木」の字を集め成したものである。説く者いはく、太古、東海の島に大木があつた。扶桑といふ朝曦は正にその木の蔭から昇る。やがてその象を採つて「東」の字を作つたのである。と。日すでに昇つて扶桑の梢に懸る、「木」の上に「日」を載せて「杲」である。日の高々と升る義。日はまだ升らずに扶桑の木蔭に居る。その象を字に現して「杳」の字は作られた。杳は「はるか」と訓む。ほの／＼と明るい義であるとか。私はかうした訓詁を穿鑿するのをやめる。

我が邦の國旗はいふまでもなく朝日を象つたものである。日出

訓詁

日出でて三竿

(一)桓武天皇より
出た平氏の末
磐城國相馬郡
中村に居つた。

でて三竿、正に「杲」の字にあたる。相馬侯の軍旗の徽號は、黒地に朱く日の丸をゑがいたものであつた。侯の封域は我が邦の東の涯、東海に接してゐた。東溟の夜はまだ明けないうちに、早くも太陽を見るといふ意味で、夜を黒地に日の丸をゑがいたものであるといふ。正しく「杳」の字に當る。知らぬ間にいつしか又理窟に墮した。まづ屠蘇の滿を引かう。

元日やこの時人壽二萬歳。

一七 今様三題

萬劫年ふる

萬劫年ふるかめやまの

したは泉の深ければ、

苔むす岩屋に松生ひて、

梢に鶴こそ遊ぶなれ。

松の木かげ

萬劫年ふる

松の木かげに立ちよれば、千歳の緑ぞ身にはしむ。
梅が枝かざしにさしつれば、春の雪こそふりかゝれ。

蓬萊山

蓬萊山には千歳ふる、萬歳千秋かさなれり。
松の枝には鶴巢くひ、巖のそばには龜遊ぶ。

一八 安宅 その一

ワキ詞かやうに候者は、加賀の國富樫の何某にて候。さても頼朝、義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿十二人の作山伏となつて、奥へ御下向の由頼朝聞し召し及ばれ、國々に新關を立てて、山伏を固く選び申せよの御事にて候。さる間、この所をば某承つて、山伏をさゝめ申候。今日も固く申しつけばやよ存候。いかに誰かある。狂言「御前に候。ワキ、けふも山伏の御通りあらば、此方へ申候へ。狂言、畏

シテ判官同行山伏 辨慶
ツレ 同行山伏 經
狂言 狂言 強力 伏
ワキ 狂言 富樫 力
の從者 富樫 力
の地名 加賀國石川郡

まつて候。

シテ山伏次第、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしをるらん。サシ、鴻門楯破れ、都の外の旅衣、日も遙々の越路の末、思ひやるこそ遙かなれ。シテ「さて御供の人々には、山伏伊勢の三郎、駿河の二郎、片岡、増尾、常陸房シテ、辨慶は先達の姿となりて、山伏、主従以上十二人、未だ習はぬ旅姿、袖の篠懸露霜を、けふ分けをめていつまでの、限りもいさや白雪の、越路の春に急ぐなり。歌、時しも頃は二月の十日の夜、月の都を立出でて、これやこの、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の山、隱す霞ぞ春は恨めしき。浪路遙かに行く舟の、海津の浦に着きにけり。東雲早く明けゆけば、淺茅色づく有乳山、歌、氣比の海宮、居久しき神垣や、松の木芽山、なほ行く前に見えたるは、柚山人の板取、河瀬の水の淺洲津や、末は三國の湊なる、蘆の篠原波よせて、靡く嵐の烈しきは、花の安宅に着きにけり。

(一) 義盛
(二) 清重
(三) 八郎弘常
(四) 十郎兼房
(五) 海尊
(六) 文治三年
(七) これやこの行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の關、(八) 後撰集、(九) 山かくす春の霞ぞ恨めしき、(一〇) 境なるらおき、(一一) 古今集、(一二) 近江國高島郡、(一三) 矢田の野に淺茅色づく有乳山、(一四) 淡雪寒くぞあらし、(一五) 古今集、(一六) 敦賀灣のこ、(一七) 越前國敦賀郡、(一八) 近江と越前の國境、(一九) 越前國足羽郡

(五)同國坂井郡。
(六)加賀國沼江郡。
(七)同國能美郡小松町附近。

シテ詞、御急ぎ候ほごに、これははや安宅の湊に御着きにて候。暫くこの所に御休みあらうずるにて候。判官詞、いかに辨慶。シテ、御前に候。判官、たゞ今旅人の申して通りつる事を聞いてあるか。シテ、いや何とも承らず候。判官、安宅の湊に新關を立てて、山伏を固く選ぶこそ申しつれ。シテ、言語道斷の御事にて候ものかな。さては御下向を存じて立てたる關と存候。これはゆゝしき御大事にて候。まづこの傍にて暫く御談合あらうずるにて候。ツレ、我等が心中には、何程の事の候べき、たゞうち破つて御通りあれかしと存候。シテ、しばらく。仰の如く、この關一所うち破つて御通りあらうずるは、易き事にて候へども、御出で候はんずる行末が御大事にて候。たゞ何ともして無異の儀が然るべからうずると存候。判官、ごもかくも辨慶計らひ候へ。シテ、畏まつて候。某きつと案じ出したる事の候。我等を始め、皆々につくい山伏にて候が、何と申しても御姿かくれ御座なく

候間、このまゝにては如何と存候。恐多き申事にて候へども、御篠懸を除けられ、あの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ、御笠を深き召され、いかにも草臥れたる御體にて、我等より後に引下つて御通り候はば、なか／＼人は思ひもより申すまじきと存候。判官、げにこれは尤もにて候。さらば篠懸を取候へ。シテ、畏まつて候。いかに強力。狂言、御前に候。シテ、笈を持ちて來り候へ。狂言、畏まつて候。シテ、汝が笈を御肩に置かるゝ事は、なんぼう冥加もなき事にてはなきか。まづ汝は先へ行き、關の様體を見て、誠に山伏を選ぶか、又さやうにもなきか、懇に見て來り候へ。狂言、シカ／＼。シテ、さらば御立ちあらうずるにて候。げにや紅は園生に植ゑても隠なし。山伏、強力にはよも目をかけじと、御篠懸を脱ぎかへて、麻の衣を御身に纏ひ、シテ、あの強力が負ひたる笈を、判官、義經とつて肩にかけ、山伏、笈の上には雨皮、形箱取附けて、判官、綾菅笠にて顔を隠し、山伏、金剛杖に縋り、

〔富樫の従者。〕

判官、足痛げなる強力にて、地よる／＼として歩み給ふ御有様ぞ痛はしき。シテ詞、我等より後に引下つて御出であらうざるにて候。さらば皆々御通り候へ。山伏、承り候。

〔狂言〕いかに申候。山伏たちの大勢御通り候。ワキ詞、何ぞ、山伏の御通りあると申すか。心得である。なう／＼客僧たち、これは關にて候。シテ詞、承り候。これは南都東大寺建立の爲に、國々へ客僧を遣はされ候。北陸道をばこの客僧承つて罷り通り候。まづ勸に御入り候へ。

ワキ、近頃殊勝に候。勸には參らうずるにて候。さりながら、これは山伏たちに限つてこめ申す關にて候。シテ、さてそのいはれは候。ワキ、さん候。頼朝、義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿は奥秀衡を頼み給ひ、十二人の作山伏となつて御下向の由、その聞え候間、國々に新關を立てて、山伏を固く選り申せこの御事にて候。さる間、この所をば某承つて、山伏をこめ申候。殊にこれは大勢御座候間、一人も



能
宅
安
の
能
通し申すまじく候。シテ、委細承り候。それは作山伏をこそこめよと仰せ出され候ひつらめ。よも眞の山伏をこめよとは仰せられ候まじ。狂言、いや、きのふも山伏を三人まで斬つたる上は。シテ、さてその斬つたる山伏は判官殿か。ワキ、あらむづかしや問答は無益。一人も通し申すまじい上は候。シテ、さては我等をも、これにて誅せられ候はんずるな。ワキ、なか／＼のこころ。シテ、言語道斷か、る不祥なる所へ來懸つて候ものかな。この上は

力及ばぬこと。さらば最期の勤を始めて、尋常に誅せられうずるに
て候。皆々近う渡り候へ。

一九 安宅 その二

シテ、いで、最期の勤を始めん。それ山伏といつは、役の優婆塞の
行儀を受け、ッレ、その身は不動明王の尊容をかたごり、シテ、兜巾
といつは、五智の寶冠なり。山伏、十二因縁の褶をすゑて戴き、シテ、九
會曼茶羅の柿の篠懸、山伏、胎藏黑色の脚半をはき、シテ、さて又八目
の草鞋は、山伏、八葉の蓮華をふまへたり。シテ、出で入る息に阿吽の
二字を唱へ、山伏、即身即佛の山伏を、シテ、ここにて討ちごめ給はん
こと、山伏、明王の照覽計り難う、シテ、熊野權現の御爵の當らんこと、
山伏、立所において、シテ、疑あるべからず。地、唵阿毘羅吽欠と、珠數
さらく、と押揉めば、ワキ詞、近頃殊勝に候。前に承り候ひつるは、南

(一)醫僧。法然上人の高弟。大
佛勸進のため諸國を巡遊し
た。元久二年(八六五年)寂
年八十六

都東大寺の勸進と仰せ候間、定めて勸進帳の御座なき事は候まじ
勸進帳を遊ばされ候へ。これにて聽聞申さうずるにて候。シテ、何と
勸進帳を讀め候や。ワキ、なかの事。シテ、心得申して候。シテ、本
より勸進帳はあらばこそ、笈の中より往來の、卷物一卷取出し、勸進
帳と名附けつ、高らかにこそ讀上げけれ。それつらく、地、惟れ
ば、大恩教主の秋の月は涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長き夢、驚かす
べき人もなし。ここに中頃帝おはします。御名をば聖武皇帝と名づ
け奉り、最愛の夫人に別れ、戀慕やみ難く、涕泣眼に荒く、涙玉を貫く、
思を善途に翻して、廬舍那佛を建立す。かほごの靈場の絶えなんこ
を悲しみて、俊乘房重源、諸國を勸進す。一紙半錢の奉財の輩は、こ
の世にては無比の樂に誇り、當來にては數千蓮華の上に坐せん。歸
命稽首敬つて白す。と、天も響けと讀上げたり。ワキ、關の人々肝を消
し、地、恐をなして通しけり。ワキ詞、急いで御通り候へ。シテ、承り候。

一期の浮沈

狂言、いかに申上候。判官殿の御通り候。ワキ、いかにこれなる強力とまれこそ。山伏、すは我が君を怪しむるは、一期の浮沈極りぬと、皆一同に立歸る。シテ詞、あゝ暫くあわてて事を仕損ずな。やあ何とてあの強力は通らぬぞ。ワキ、あれは此方よりとめて候。シテ、それは何とて御とめ候ぞ。ワキ、あの強力がちと人に似たると申す者の候ほどに、さてとめて候よ。シテ、何と、人が人に似たるとは、珍しからぬ仰にて候。さて誰に似て候ぞ。ワキ、判官殿に似たると申す者の候ほどに、落居の間とめて候。シテ、や、言語道斷。判官殿に似申したる強力めは、一期の思出な。腹立ちや、日高くば能登の國まで指さうずると思ひつるに、僅かの笈負うて後にさがればこそ人も怪しむれ。總じてこのほど憎し憎しと思ひつるに、いで物見せてくれんとて、金剛杖をおつ取つて、さんぐに打擲す。通れこそ。や、笈に目をかけ給ふは、盗人ぞふな。地方々は何故に、かほど賤しき強力に、太刀、刀ぬき

めだれ顔

給ふは、めだれ顔のふるまひは、臆病の至かこ、十一人の山伏は、打刀ぬきかけて、勇みかゝれる有様は、いかなる天魔鬼神も、恐れつべうぞ見えたる。ワキ詞、近頃誤りて候。はやゝ御通り候へ。

シテ詞、さきの關をば早抜群に程隔りて候間、この所に暫く御休あらうずるにて候。皆々近う御参り候へ。いかに申上候。さてまた今、は餘りに難儀に候ひしほどに、不思議の働を仕候事、これと申すに、君の御運盡きさせ給ふにより、今辨慶が杖にもあたらせ給ふと思へば、愈あさましようこそ候へ。判官詞、さては悪しくも心得ぬと存ず。いかに辨慶、さてもたゞ今の機轉、更に凡慮よりなす業にあらず。ただ天の御加護こそ思へ。關の者ども我を怪しめ、生涯限りありつるところに、ごかくの是非をばもんだはずして、たゞ眞の下人の如く、さんぐに打つて我を助くる、これ辨慶が謀にあらず、八幡の地御託宣かと思へば、忝くぞ覺ゆる。

凡慮

地クリ、それ世は末世に及ぶといへども、日月は未だ地に落ち給はず。たごひいかなる方便なりとも、正しき主君を打つ杖の、天罰に當らぬ事やあるべき。判官サシ、げにや現在の果を見て、過去未來を知るごいふ事、地、今に知られて身の上に、憂き年月のきさらぎや、下の十日のけふの難を、遁れつるこそ不思議なれ。判官、たゞさながらに十餘人、地、夢の覺めたる心地して、互に面を合はせつゝ、泣くばかりなるありさまかな。クセ、然るに義經、弓馬の家生まれ來て、命を頼朝に奉り、屍を西海の浪に沈め、山野海岸に起きふしあかす武士の、鎧の袖枕片敷く隙も波の上、或時は舟に浮かび、風波に身を任せ、或時は山脊の馬蹄も見えぬ雪の中に、海少しある夕波の、立ちくる音や須磨明石の、ごかく三年の程もなく、敵を亡し靡く世の、その忠勤もいたづらに、成果つるこの身の、そも何ごいへる因果ぞや。判官、げにや思ふ事、かなはねばこそ憂世なれと、地、知れどもさすがな

聊爾

は、思ひ返せば梓弓の、すぐなる人は苦しみて、讒臣はいやましに世にありて、遼遠東南の雲を起し、西北の雪霜に、責められ埋る憂き身を、ごごわり給ふべきなるに、たゞ世には、神も佛もましまさぬかや。恨めしの憂世や、あら怨めしの憂世や。
 ○ワキ詞、いかに誰かある。狂言、御前に候。ワキ、さても山伏たちに聊爾を申して、餘りに面目もなく候ほどに、追つつき申し、酒を一つ參らせうずるにてあるぞ。汝は先へ行きてごめ申候へ。狂言、畏まつて候。いかに申候。さきには聊爾を申して餘りに面目もなく候とて、關守のこれまで酒を持たせて參られて候。シテ詞、言語道斷の事やがて御目に懸らうずるにて候。狂言、シカト。
 シテ、げに、これも心得たり。人の情の盃に、浮けて心をさらんごや。これにつきてもなほ、人に、心なくれそ吳織。地、怪しめらるな面々、辨慶に諫められて、この山陰の一宿に、さらりと圓居して、

(一)比叡山には東塔、西塔、横川塔、三つあり、辨慶はそでの西塔に住んで居つた。

所も山路の菊の酒を飲まうよ。シテ、面白や山水に、盃を浮かべては流に引かる、曲水の、手まづ遮る袖ふれて、いざや舞を舞はうよ。もさより辨慶は、三塔の遊僧、舞延年の時の和歌。これなる山水の、落ちて巖に響くこそ、地鳴るは瀧の水。
シテ、たべ酔ひて候ほごに、先達御酌に参らうずるにて候。ワキ詞、さらばたべ候べし。ごても、の事に、先達一さし御舞ひ候へ。シテ、承り候。地、鳴るは瀧の水。シテ、なるは瀧の水。地、日は照るこも、絶えずこ。うたり。絶えずこ。うたり。疾く、立てや手束弓の、心ゆるすな關守の人々。暇申してさらばよごて、笈をおつ取り肩にうち懸け、虎の尾を履み毒蛇の口を、遁れたる心地して、陸奥の國へご下りけり。

二〇 小 謠

高 砂

(二)太平之世、五日一風、十日一雨、鳴枝、雨不、破塊、(王、弁、論、衡)

(三)京都賀茂川にかつてある二橋

四海浪しづかにて、國も治る時つ風枝をならさぬ御代なれや。あひに相生の松こそめでたかりけれ。實にやあふぎても、こごもおるかや、かゝる代にすめる民ごて、豊なる君の恵ぞ有難き。

熊 野

(三) 四條五條の橋の上、老若男女、貴賤都鄙、いろめく花衣、袖をつらねて行末の、雲かご見えて八重一重、咲く九重の花盛、名におふ春の景色かな。

鶴 龜

敷 妙

庭の砂は金銀の、玉をつらねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の扉、碓のゆきげた瑪瑙の橋、池の汀の鶴龜は、蓬萊山も餘所ならず。君の恵ぞ有難き。

鞍馬天狗

(三) 花さかば、告げんさいひし山里の使は來たり馬に鞍、鞍馬の山の

(三)花さかばつげんさいひし山人の來る音すなり馬に(源賴政)

うず櫻、手折るしをりをしるべにて、奥も迷はじ咲きつゞく、木蔭に並みゐて、いざ／＼花をながめん。

烏帽子折

かやうに祝ひつゝ、程なく烏帽子折立てて、花やかに三いろ組のゑぼし懸緒取出し、氣高く結びすまし、召されて御覽候へこて、おぐしの上のうち置き、立退きて見れば、あつはれ御器量や。これぞ弓矢の大將と申すこも、不足よもあらじ。

懸緒

一二 人格の表出

倉田 百三

内面生活

我々の感情や意志の表出は、我々の人格がいかなるものであるかを直接に他人に印象せしめる機會である。我々の内面生活は、自然に肉體的表出を求めようとする衝動を持つものである。しかしながら我々が他人に對してこの表出を印象しようとする欲し、或は自

Culture

然に印象すべき位置に置かれた時、その表出の仕方は、對人關係の道德に依つて制約せられなければならない。表出の仕方が自由であり、自然であり、その場所と時にふさはしい、即ち禮に適ふか否かは、我々のカルチュアの程度を示す標幟であるが、自分はここでは特に我々が卑しむべきものとして考へねばならない、即ち我々が人格の尊威を傷つけるやうな表出の仕方のみ選んで擧げる。

我々の内面の状態が、即ち表出せられるところのものが、卑しむべきものである時、その自然な表出が卑しむべき印象を與へることはいふまでもない。しかし我々の内面の状態が卑しむべきものでなくとも、その表出の仕方が人格の尊威を傷つけるやうなものである時には、それはなほ卑しむべきものとなる。例へば、我々が飢を感じることは自然である。しかし我々がかの犬の如くにその飢を露骨に表して、物欲しさうな眼付をして他人の食膳を窺ふなら

ば、それは自己の人格の尊威を保ち得ないものとして、卑しまれねばならない。隣人の愛に飢ゑた時に於ても、その人間らしい孤獨の淋しさや飢渴をも、餘りに哀願的に相手と時と場所に對する考慮を費す餘裕なく表出することは、人格の尊威を傷つけないではおかない。すべて他人の感情に訴へ過ぎる、女々しく、未練がましく、愚痴つほい表出は、高貴の徳と一致しないものである。決して自己の内面の現實を他人に隠蔽することがいいといふのではない。自己の苦痛や悲哀に堪得ることが、人格の尊威を構成する重要な力だからである。我々が他人に向かつて苦痛や悲哀を訴へることは、却つて彼等の苦痛や悲哀の原因となり、これに對する同情と奉仕との義務を負はせることになる。しかも多くの人々は自己の無力や、運命の不可抗力や、己自らの不幸の爲に我々の愁訴を容れる餘裕のない場合が少くなく、その爲彼等を徒に窘窮せしめるに過ぎない。

Stoic

い結果となる。これ我々が自己の苦痛や悲哀を他人に表出することを、出來得る限り抑制しなければならぬ所以である。故に自己の苦痛や悲哀の表出に關しては、⁽¹⁾ストイック的な寡黙の方が、高貴の徳と一致する。瘖我慢や負惜みのやうな不自然さは賞讃すべきものではないが、なほそれは卑しむべき感を與へない。しかし自己の負ふべきものを負はず、自己の過失や蟲の良さを棚に上げ、過剰にして亂れた表情を以て泣き訴へることは、人格の威嚴を傷つける。しかもそれが何等の効果なき愚痴の場合に於てなほ更である。不可抗な運命を勇ましく負うて忍受することは、人格の尊威と力との靜的な現れとして、尊い感を與へる。單に苦痛や悲哀の表出のみならず、愛や、好意や、怒や、その他すべての感情の表出が過多で輕しいことは、高貴の徳と一致しない。この點に於ては、自分は西洋風の表出よりも、東洋風の表出を好むものである。殊に彼の能樂に

尊い感に打たれるのである。我々の表出は人間らしきと、超人らしきと、天使らしきなどの種々な段階がある。より高い階段より見れば、より低い階段に於ける表出は、高貴の徳に於て足りないものである。超人より見れば、人間らしい表出は甘く、弱く、若しくはあはれに見えるであらう。

我々は高く登り、遠く願ふに随つて、卑しむべきものの領域を擴張する。すべてのものは自己の境涯にふさはしい表出を求めらるであらう。自分がここに擧げたのは、人間らしきとの階段に於て、卑しむべき表出である。人間らしい表出として卑みに洩得るものは、神の目に於ても、少くとも愛するに堪へたものと成得るであらう。信ずるからである。しかし我々は天使らしい階段より自己の卑しさを省得るまで向上することを願はなければならぬ。——超克——

二二 麒麟 その一 谷崎潤一郎

鳳兮鳳兮。何徳之衰。

往者不可諫。來者猶可追。已而已而。今之從政者殆而。

西曆紀元前四百九十三年、左丘明、孟軻、司馬遷等の記録によれば、魯の定公が十三年目の郊の祭を行はれた春の始、孔子は數人の弟子たちを車の左右に従へて、その故郷の魯の國から傳道の途に上つた。

泗水の河の畔には芳草が青々々芽ぐみ、防山、尼丘、五峰の頂の雪は溶けても、沙漠の砂を攔んで來る匈奴のやうな北風は、いまだに烈しい冬の名残を吹送つた。元氣の好い子路は紫の貂の裘を翻して、一行の先頭に進んだ。考深い眼つきをした顔淵、篤實らしい風采の曾參が、麻の履を穿いてその後を續いた。正直者の御者の樊遲は、駟馬の銜を執りながら、時々車上の夫子が老顔を窃み視て、傷まし

(一) 論語、周代魯の孔子の著した。 (二) 學者、春秋左氏の傳を著した。 (三) 學者、周代魯の孔子の著した。 (四) 學者、前漢の公羊公羊の著した。

い放浪の師の身の上に涙を流した。
或日愈、一行が魯の國境までやつて來ると、誰も彼も名殘惜しうに、故郷の方を振返つたが、通つて來た路は龜山の蔭に隠れて、見えなかつた。すると孔子は琴を執つて、

(一) われ魯を望まんぞ欲すれば

龜山これを蔽ひたり。

手に斧柯なし、

龜山をいかにせばや。

かういつて、さびた皺唄れた聲で唄つた。

これから又北へ北へ三日ばかり旅を續けると、廣々とした野に、安らかな屈

託のない歌の聲が聞えた。それは鹿の裘に索の帶をしめた老人が、畦路に遺穂を拾ひながら、唄つてゐるのであつた。

(一) 琴曲の歌で、
文體明辨卷九
に出る居る。
「予欲望魯
兮、龜山蔽之、
手無斧柯。」
奈「龜山」何。



「由や、お前にはあの歌がどう聞える。」

と、孔子は子路を顧てたづねた。

「あの老人の歌からは、先生の歌のやうなあはれな響が聞えませんが。大空を飛ぶ小鳥のやうな、恣な聲で唄うて居ります。」

「さもあらう。彼こそ古の老子の門弟ぢや。林類といつてもはや百歳になるであらうが、あの通り春が來れば畦に出て、何年こなく歌を唄うては穂を拾うてゐる。誰か彼處へ行つて話をして見るがよい。」

かういはれて、弟子の一人の子貢は、畑の畔へ走つて行つて老人を迎へ、たづねていふには、

「先生はさうして歌を唄うては、遺穂を拾つて入らつしやるが、何も悔いるところはありませぬか。」

しかし老人は振向もせず、餘念もなく遺穂を拾ひながら、一步一

歩に歌を唄つて止まなかつた。子貢がなほその跡を追うて聲をかける。漸く老人は唄ふことをやめて、子貢の姿をつくつく眺めた後、

「わしに何の悔があらう。」
といつた。

「先生は幼い時に行を勤めず、長じて時を競はず、老いて妻子なく、漸く死期が近づいてゐるのに、何を樂みに穂を拾つては歌を唄うておいてなさる。」

すると老人はから／＼と笑つて、
「わしの樂みとするものは、世間の人が皆持つてゐて、却つて憂としてゐる。幼い時に行を勤めず、長じて時を競はず、老いて妻子もなく、漸く死期が近づいてゐる。それだからこのやうに樂しんでゐる。」

「人は皆長壽を望み、死を悲しんでゐるのに、先生はどうして死を樂しむことが出来ますか。」

と、子貢は重ねてきいた。

「死と生とは、一度往つて一度返るのぢや。ここで死ぬのは、かここで生まれるのぢや。わしは生を求めて齷齪するのは惑ぢや。といふことを知つてゐる。今死ぬるも昔生まれだのと變りはないと思つてゐる。」

老人はかく答へて、又歌を唄ひ出した。子貢には言葉の意味が解らなかつたが、戻つて來てこれを師に告げると、
「なか／＼話せる老人であるが、しかしそれはまだ道を得て至り盡さぬものと見える。」

と、孔子がいつた。
それから又幾日も／＼長い旅を續けて、箕水の流を涉つた。夫子

が戴く錙布の冠は埃にまみれ、狐の裘は雨風に色褪せた。

「魯の國から孔丘といふ聖人が來た。その人は暴虐な私たちの君や妃に、幸な教と賢い政を授けてくれるであらう。」

衛の國の都に入ると、巷の人々はかういつて、一行の車を指さした。その人々の顔は饑と疲に瘦衰へ、家々の壁は嗟きと愁みの色をたへてゐた。その國の麗しい花は、宮殿の妃の眼を喜ばす爲に移し植ゑられ、肥えた豕は妃の舌を培ふ爲に召上げられ、長閑な春日が灰色に寂れた町をいたづらに照らした。さうして都の中央の丘の上には、五彩の虹を繡出した宮殿が、血に飽いた猛獸の如くに屍骸のやうな街を瞰下してゐた。その宮殿の奥で打鳴らす鐘の響は、猛獸の嘯くやうに國の四方へ轟いた。

「由や、お前にはあの鐘の音がどう聞える。」

と、孔子は又子路にたづねた。

「あの鐘の音は、天に訴へるやうなはかない先生の調とも違ひ、天にうち任せたやうな自由な林類の歌とも違つて、天に背いた歡樂を讚へる、恐しい意味を歌うて居ります。」

「さもあらう。あれは昔衛の襄公が、國中の財と汗とを絞り取つて造らせた林鐘といふものぢや。その鐘が鳴る時は、御苑の林から林へ反響して、あのやうな物凄しい音を出す。又暴政に苛まれた人々の呪と涙が封じられてゐて、あのやうな恐しい音を出す。」

と、孔子は教へた。

一三三 麒 麟 その二

衛の君の靈公は、國原を見晴す靈臺の欄に近く、雲母の硬屏、瑪瑙の榻を運ばせて、青雲の衣を纏ひ、白霓の裳裾を垂れた夫人の南子と、香の高い秬鬯を酌交しながら、深い霞の底に眠る野山の春を眺

「天にも地にも、うらゝかな光が泉のやうに流れてゐるのに、何故私の國の民家では美しい花の色も見えず、快い鳥の聲も聞えないのであらう。」

かういつて、公は不審の眉を顰めた。

「それはこの國の人民が、わが公の仁徳と、わが夫人の美容を讚へる餘り、美しい花とあれば、悉く献上して、宮殿の園生の墻に移し植ゑ、國中の小鳥までが、一羽も残らず花の香を慕うて、園生のめぐりに集るからでございます。」

と、君側に控へた宦官の雍渠が答へた。するこそその時、寂れた街の静けさを破つて、靈臺の下を過ぎる孔子の車の玉鑾が、珊瑚と鳴つた。「あの車に乗つて通る者は誰であらう。あの男の額は堯(一)に似てゐる。あの男の目は舜(二)に似てゐる。あの男の項は皋陶(三)に似てゐる。」

(一)帝堯陶唐氏。支那古代の聖王。
(二)帝舜有虞氏。堯の後を繼いだ聖王。
(三)舜に仕へた賢臣。

(一)支那春秋時代鄭國の賢相。
(二)支那古代の聖王。夏の國の始祖。

(三)老子の名。

(四)支那古代の聖君。周の始祖。武王の父。

肩は子産(一)に類し、腰から下が禹(二)に及ばぬこと三寸ばかりである。これ(三)も側に伺候してゐた將軍の王孫賈が、驚の眼を見張つた。「しかし、まああの男は、何といふ悲しい顔をしてゐるのだらう。將軍、卿は物識だから、あの男がどこから來たか、わたしに教へてくれたがよい。」

かういつて、南子夫人は將軍を顧み、走り行く車の影を指さした。「私は若い頃諸國を遍歴しましたが、周の史官を勤めてゐた老聃(三)といふ男の他には、まだあれほど立派な相貌の男を見たことがありません。あれこそ故國の政に志を得ないで、傳道の途に上つた魯の聖人の孔子であらう。その男の生まれた時、魯の國には麒麟が現れ、天には和樂の音が聞えて、神女が天降つたといふ。その男は牛の如き唇と、虎の如き掌と、龜の如き背とを持ち、身の丈が九尺六寸あつて、文王(四)の容體を備へてゐるといふ。彼こそその

男に違ありませぬ。

かう王孫賈が説明した。

「その孔子といふ聖人は、人にいかなる術を教へるものであるか。」

「靈公は手に持った盃を乾して、將軍に問うた。『聖人といふものは、世の中のすべての知識の鍵を握つて居ります。しかしあの人は、専ら家を齊へ、國を富まし、天下を平げる政の道を、諸國の君に授けると申します。』將軍が再びかう説明した。

「わたしは世の中の美色を求めて南子を得た。又四方の財寶を萃めてこの宮殿を造つた。この上は天下の覇を唱へて、この夫人が宮殿にふさはしい權威を持ちたく思うてゐる。どうかしてその聖人をここへ呼びいれて、天下を平げる術を授けたいものぢや。」

「公は卓を隔てて對してゐる夫人の唇を覗つた。何となれば、平生公の心をいひ表すものは、彼自身の言葉でなくつて、南子夫人の唇から洩れる言葉であつたから。」

「わらはは世の中の不思議といふものに遇つて見たい。あの悲しい顔をした男が眞の聖人なら、わらははに色々な不思議を見せてくれるであらう。」

かういつて、夫人は夢見るやうな瞳を上げて、遙かに隔り行く車のあこを眺めた。

孔子の一行が北宮の前にさしか、つた時、賢い相を持つた一人の官人が、大勢の供を従へ、屈産の駟馬に鞭うち、車の右の席を空けて、恭しく一行を迎へた。

「私は靈公の命を受けて、先生をお迎に出た仲叔圉と申すもの

屈産
屈は晋の地名。
良馬を産する。

でございます。先生がこの度傳道の途に上られたことは、四方の國々までも聞えて居ります。長い旅路に先生の翡翠の蓋は風に綻び、車の軛からは濁つた音が響きます。願はくはこの新しい車に召替へられ、宮殿に駕を枉げて、民を安んじ國を治める先王の道を、我等の公に授け給へ。先生の疲勞を癒す爲には、西圃の南に水晶のやうな温泉が沸々こたぎつて居ります。先生の咽喉を濕す爲には、御苑の園生に芳しい柚、橙、橘が甘い汁を含んで實のつて居ります。先生の舌を慰める爲には、苑圃の檻の中に、肥太つた豕、熊、豹、牛、羊が蔭のやうな腹を抱へて眠つて居ります。願はくは二月も、三月も、一年も、十年も、この國に車を駐めて、愚かな私たち公の曇つた心を啓き、盲ひた眼を開き給へ。

仲叔圉は車をおりて、慇懃に挨拶をした。

「私の望むところは、莊麗な宮殿を持つ王者の富よりは、三王の

道を慕ふ君公の誠であります。萬乗の位も桀紂の奢の爲にはなほ足らず、百里の國も堯舜の政を布くには狭くはありませぬ。靈公がまことに天下の禍を除き、庶民の幸を圖る御志ならば、この國の土に私の骨を埋めても悔いませぬ。

かく孔子は答へた。

やがて一行は導かれて、宮殿の奥深く進んだ。一行の黒塗の沓は、塵も止めぬ砥石の床に憂々こ鳴つた。

以て裳を縫ふべし。

と、聲をそろへて歌ひながら、大勢の女官が梭の音たかく錦を織つてゐる織室の前も通つた。錦のやうに咲きこぼれた桃の林の陰からは、苑圃の牛の懶げに呻る聲も聞えた。

靈公は賢人仲叔圉のはからひを聽いて、夫人を始め一切の女を

(一)詩經、魏風葛屨篇に出で居る「糾々葛屨、可ニ以履之。可ニ以縫之。」

遠ざけ、歡樂の酒の泌みた唇を濯ぎ、衣冠正しく孔子を一室に請じて、國を富まし、兵を強くし、天下に王となる道を質した。

しかし聖人は人の國を傷つけ、人の命を損ふ戦のことに就いては、一言も答へなかつた。又民の血を絞り、民の財を奪ふ富のことに就いても教へなかつた。さうして軍事よりも、産業よりも、第一に道徳の貴いことを嚴に語つた。力を以て諸國を屈服する覇者の道と、仁を以て天下を懷ける王者の道との區別を知らせた。

「公がまことに王者の徳を慕ふならば、何よりもまづ私の慾にうち克ち給へ。」

これが聖人の誠であつた。

その日から靈公の心を左右するものは、夫人の言葉でなくつて、聖人の言葉であつた。朝には廟堂に參して正しい政の道を孔子に尋ね、夕には靈臺に臨んで天文四時の運行を孔子に學んだ。錦を織



孔子
(藏館物博ントスボ)

(一)名は柳次郎。戯號を藪野椋十といふ。熊本縣の人。
 (二)孔子廟のこま。支那山東省曲阜に在る。
 (三)孔子の後裔に當る人でこの曲阜の名族として居る。その人の住宅をかく稱する。その附近を監理する役所の名となつて居る。
 (四)孟子から出た柏語。
 稱ひの木類の總

る織室の梭の音は、六藝を學ぶ官人の弓弦の音、蹄の響、筆、策の聲に變つた。一日公は朝早く獨り露臺に上つて國中を眺める。野山には美しい小鳥が囀り、民家には麗しい花が咲き、百姓は畑に出て公の徳を讚へ歌ひながら、耕作にいそしんでゐるのを見た。公の眼からは熱い感激の涙が流れた。

——麒麟——

孔子の故郷〔自修文〕

澁川玄耳

(一)大成殿參拜に出かける。四時過ぎてゐる。最早暮れるに間がない。大きな門を入ると廣場がある。右に大きな邸宅がある。これが衍聖公府だ。教へられたその隣が即ち聖廟である。(四)金聲玉振」と題した門を入つて、次々にいくつかの門を潜つた。役人だか番人だかが五六人ゐた。晚いから參拜は出來ぬといふのを、日本から來た衍聖公へ紹介狀持參のものだといつて、開門させた。境内は柏が天を蔽うてゐる。莊嚴な殿堂樓閣が相連つてゐる。大成殿の石柱

怎麼生
宋時代の俗語
で「いかに」
の義。
程頤のこと。
明道先生といふ。
宋時代の學者。
元豐八年(一〇七四)歿。
五十四年。

の如きはエジプト、アラビヤ、ギリシヤ、ローマの建築に比して譲るところがない。その巨大な點に於ても、柱を捲く雙龍の彫刻の意匠技能に於ても、亦支那の誇であること聞いてゐるが、成程さうだらうと驚歎して、柱を撫でまはして見た。忙しい中に、案内人は傍の石欄の柱を平手で敲いて予を招く。何かさきけば、黙つて又敲く。奇なるかな。例へば釣鐘を平手で敲いたやうに、金屬のやうな響がする。予は賢し氣に外の二三本の石柱を試みて見たが、一個もそんな響はない。皆頑然たる石の音、いたづらに掌が痛かつた。案内者は、怎麼生といつたやうな顔で、予を顧て一笑する。

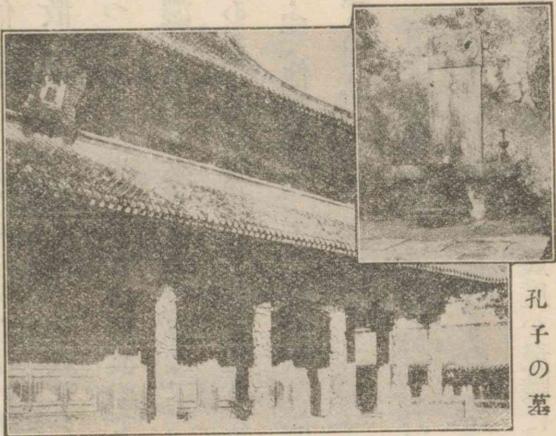


金聲玉振門

孔子に對する渴仰者には幾種類がある。程子はいく、論語を讀むに、讀了の後全然事なきものあり。讀了の後一兩句を得て喜ぶものあり。讀了の後これを好むことを知るものあり。讀了の後直ちに手

の舞ひ足の踏むところを知らざるものあり。」と。この最後の歡喜者が、眞に渴仰信心の輩である。

孔子の墓



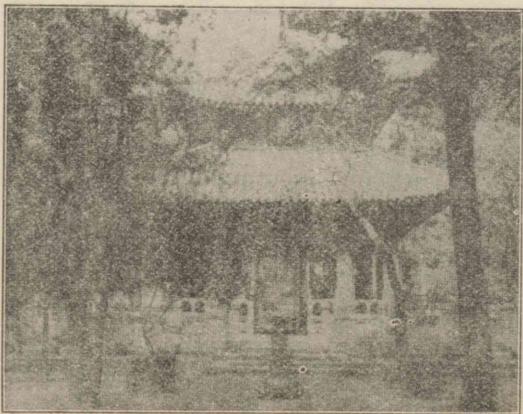
大成殿 (在支那泰山)

支那は歴代概ね試験を以て官を採つた。支那の試験には儒學の知識が基礎であつた。随つて支那に於ける孔子教の勢力は、一面に於て法制の力を借りて普及したと謂つてよい。これに加へて、歷朝の帝王が政略的に尊敬を加へたので、孔子は國教の本尊となり、曲阜は支那のエルサレム、メッカとなつた。そしてその殿堂樓閣は全く宗教的に莊嚴を極めてゐるのである。

孔子廟は孔子の住家の跡に建てたものと傳へられてゐる。境内に種々な遺蹟がある。杏壇といふのは、孔子がその門徒に教を説いた所ださうだ。孔子手植

(1) Jerusalem.
アジヤトルコのシリアの都。キリストの墳墓の地。
(2) Mecca.
回々教の聖都。

の柏といふのもある。何度か焼け、何度か枯れて、又芽生が出たのだといふ。いづれも餘りあてにはなるまい。門の内に入れば、ここも古柏が茂つてゐる。他に比して多く人の入らない所と思しく、地面は湿つて、草が高く、枯枝など散らばつて、何さなく物寂しい。恰も月が昇つてゐる。歩くうちに牙渡つて、柏樹の影が濃くなつて来る。奥の方に二三の碑が建ててある。「孔宅故井」と誌してある。案内者はいふ、「他喫的水。こ。彼が飲んだ水。」といふ意である。



杏壇

孔子は屢餓死に瀕したことがあつた。達人は當時に容れられないものに定まつてゐる。幾度か仕官して、幾度か免職になつてゐる。偶、その成功した官歴もあるが、それは變な職務である。「初め委吏となり、料量平かなり。次に司職吏となり、畜蕃息す。」と褒められてゐる。司職吏といふの

達人
色々な意味があるが、ここでは人生を達観した人
委吏
政府の米倉を掌る役人

は、犠牲の牛羊を繋養する所の役人である。牛飼の親方である。これは青年時代の成功で、後は失意の境に在つて修養したものらしい。その再び出て仕へたのは、五十を過ぎてからである。工部大臣となり、司法大臣となり、總理大臣心得となつたが、やり過ぎて失敗した。爾來どうにかして志を行はうと、十數年間諸侯に遊説したけれど、遂に大いに用ひられる機会がなくて、子弟にも専ら詩書を講ずることになつた。しかしその全く仕官に念を斷つたのは、六十八歳であるから、孔子の功名心は随分旺盛であつたと謂はねばならぬ。予は孔子を天成の聖人とは思はない。修養の人、努力の人、精力の人として尊敬するのである。

— 小敵大敵 —

二四 無爲の祭司

富田 碎花

深く大地に根を下した
一本の立樹のやうな耕人。

(一) 澁川玄耳著、一日露戰役從軍三年、二日獨戰役小敵大敵、三日合冊したもの。
(二) 作者が「支那詩集」中の一篇「滿洲平原の風物を背景とした作である。」

君の姿は
あらゆる主張を超え、
あらゆる論議を後退させる。

いま

ここに立つ私に慙へて来るものは、
たゞ茫漠たる黄褐色の平野だけで、
深く冬眠に入つたそこからは、
それを外にした色彩は絶無である。

乾き澄んだ碧空。

多彩な興亡史を嘲笑し、

音も響もない單調に還りつくして、

おし黙つてゐる黄褐色の平野。

今は白晝である。

そこに大地から生えぬけたやうな

耕人。

君の無爲の立姿にこそ

大自然は凝つて動かない。

おゝ一切の文明よ、

それた手を拱いてゐねばならない。

この黄褐の大祭壇は

それ自身で四時の營をする。

無爲の祭司である耕人に
やがて春に緑をもやし。
秋の収穫を贈る
祭壇ではないか。

— 日本詩集 —

一五 梅

藤岡作太郎

固陰沍寒、草木なほ凍枯せる時、雪肌玉骨ひこり高く標致するも
のは梅花にして、菊花の行く秋に後れて凋むこともに、高節遙かに
群芳を抜く。牡丹は貴客、梅は隠士。彼は金屏を廻らし七寶の花瓶に
挿みて見るべく、此は茅舍竹籬、牛の聲する邊に尋ぬべし。華麗は櫻
花に及ばざれども、芳馨は薔薇に比して別に特長あり。冷艶玉を綴
つて疎々たり、老幹龍を横たへて偃蹇たり。清風雅韻百花の魁たる
もの、この花を措いて何かある。

雪肌玉骨

茅舍竹籬

(一)西暦二二〇年より二八〇年まで魏、蜀の三國が支那に鼎立した時代。
(二)吳の人、字は敬風。實鼎の初、相となつた。
(三)詩人。名は逋。廬を西湖の孤山に結び、四面皆梅を植ゑた。天禧四年(西暦一〇四二年)西暦一〇六十二年歿。
(四)大宮人は暇あざしてここにつぎへる。
(五)「わが宿の梅咲きたり告げやらば、來ちふに似たり散りぬ」ともよし。(萬葉集)
(六)「春の夜の闇はあやし梅の花、色こそ見えぬ香やは隠る」と。(古今集)

支那の文人は酷だ梅花を好めり^(一)三國の末陸凱といへる人これを江北の友に贈つて曰く、

折梅逢驛使、
江南無所有。
聊贈一枝春。
寄輿隴頭人。

宋の時、林和靖といへる高士西湖の畔に棲み、梅を植ゑ、鶴を飼へり。屢舟を湖中に泛べて遊ぶに、客至れば童子鶴を縦つてこれを報ず。その梅を詠じたる句に、「疎影橫斜水清淺。暗香浮動月黃昏。」といへるは、梅花詩中千古の絶唱と稱せらる。

我が國に於てもすでに萬葉、古今の歌集に梅花の詠多し。百磯城の大宮人は梅を挿頭して野邊に遊び、わが宿の梅咲きたりと告げやれば、好事の士は誘はずとも來る。或は闇の夜に、色こそ見えぬ香やはかくる。と稱へ、或は昔ながらの花を見て、人はいさ心も知らず。とあやぶめり。菅原道眞十一歳にして、月耀如晴雪。梅花似照星。と

（わ）人はいさ心
も知らず古里
は花ぞ昔の
香にほひけ
る（古今集）

賦せしが、後年太宰府に左遷せられ、將に家を出でんとして庭前の梅を眺めていはく、「こちふかばにほひおこせよ梅の花、あるじなしとて春を忘るな。」と。

藤原公任亦幼にして宮中に候して、

しら／＼としらけたる夜の月影に

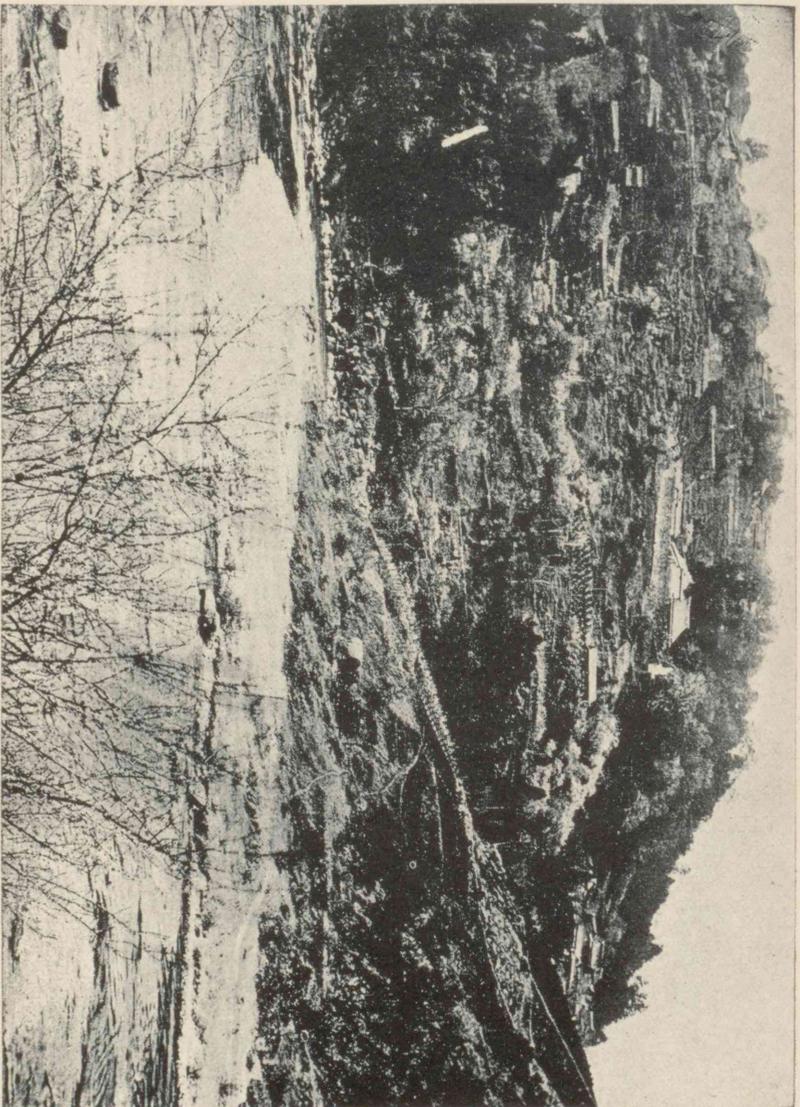
雪かきわけて梅の花をる

と詠みければ、主上深く叡感ましまし、公任も亦生涯の思出この時にありきといへりぞ。

傳へていふ、前九年の役安倍宗任捕虜となりて京師に入れるに、卿相雲客、奥の夷のさこそ無骨なるらめ、いざ戯れて笑はん。とて一枝の梅を示して、これは何ぞと問ふ。宗任とりあへず、

わが國の梅の花とは見つれども

大宮人はなにといふらん



瀨の月

(一)今神戸市の中。

(二)徂徠と號する。江戸の儒者。享保十三年(一七二八年)歿。年六十三。

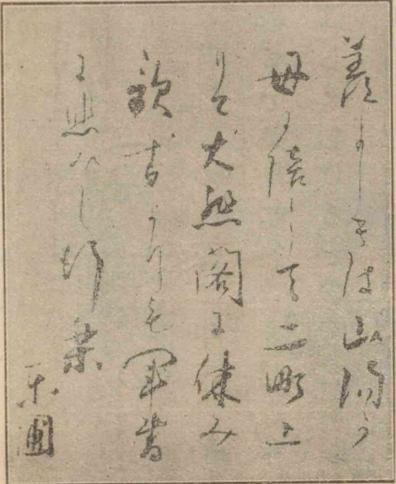
羨ましきは山陽か母に陪して二町上りて大悲閣に休み伏書よりも軍書に悲みし行樂

東園

(三)徳川齊昭。水戸藩主。萬延元年(一八六〇年)薨。年六十一。

(四)常陸國水戸市。名は正謙。伊勢の漢學者。慶應元年(一八五二年)歿。年六十九。
(六)大和國添上郡月瀬村。

と答へたるに、一座しらけて耻入りぬとなり。源平の亂、生田の森にて梶原景季、片岡の梅盛なるを手折り、箠にさして奮戦せるに、花は風に吹かれて鎧の上に散れるを、敵も身方もやさしき武士のふるまひかなと感じけりとかや。



藤岡作太郎筆蹟

梅が香や隣は萩生惣右衛門
こは、元祿の頃其角が名聲喧傳せる學者徂徠をその花に喩へて賛したるもの。

春を占へるなり、水戸の烈公が梅を種ゑしより、偕樂園は今に關東の名園となり、齋藤拙堂が記勝に寫されしより、月瀬は櫻の吉野と並べ稱せらるゝに至りぬ。

春寒未だ去らざる時、爐を擁して古人を友とすれば、遠寺の鐘聲
霜に冴ゆ。一陣の暗香に驚いて顧れば、見得たり瓶中の芳姿。これ晝
間の散策に竹外の一枝を手折りもて來し家づとなりけり。

—東圃遺稿—

二六 小野の御室

(一)文德天皇の第一の皇子。小野宮と申す。
(二)在原業平。
(三)河内國北河内郡牧野村に在つた。

昔(一)惟喬(二)の親王(三)と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに永無
瀬といふ所に宮ありけり。年ごこの櫻の花盛には、その宮へなんお
はしましける。その時、右馬頭(二)なりける人を常にゐておはしましけ
り。狩は懇にもせで、大和歌にかゝれりけり。いま狩する、交野(三)の渚の
家、その院の櫻ここにおもしろし。その木の下におりゐて、枝を折り
て、かざしにさして、皆歌詠みけり。かの右馬頭の詠める、
よの中にたえて櫻のなかりせば

又、人の歌

春のこゝろはのどけからまし



在原業平(奈良不退寺藏)

散ればこそいごぎ櫻は
めでたけれうき世に
なにか久しかるべき
歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更
くるまで物語して、さて主人の皇
子入りて、大殿ごもり給ひなんご
す。十日あまりの月も隠れなんご

大殿ごもる

すれば、かの右馬頭、

あかなくにまだきも月のかくるゝか

山の端にげて入れずもあらなん

かくしつゝ、詣で仕うまつりけるを、皇子思の外に御髪(みかみ)おろさせ

〔山城國愛宕郡〕

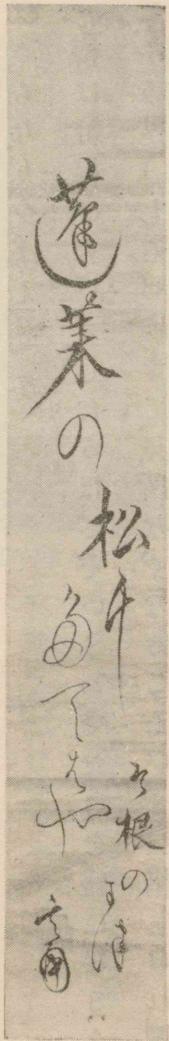
公事

給ひて、小野いふ所にすみ給ひけり。正月ひつきに拜み奉らんさて詣で
 たるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室みむろに詣でて拜み
 奉るに、つれづれいと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく
 侍ひて、いにしへの事なご思ひ出でて聞えさせけり。さても侍ひて
 しがなご思へご、公事ごもありければえ侍はで、夕暮に歸るさて、
 忘れては夢かご思ふ思ひきや
 ゆきふみわけて君を見んごは
 きてなん泣くく來にける。 — 伊勢物語による —

二七 あげ雲雀

梅一輪一輪づゝのあたゝかさ。 嵐雪
 鶯の身をさかさまに初音かな。 其角
 なに事ぞ花見る人のなが刀。 去來

蓬萊の松に
立てばやそ
ねの松
其角



蹟筆角其

世の中は三日見ぬ間に櫻かな。 蓼六
 雲雀より上にやすらふ峠かな。 芭蕉
 春の海ひねもすのたりのたりかな。 蕪村

菜の花や月は東に日は西に。 同
 けろりくわんごして烏と柳かな。 一茶
 長持に春かくれゆく衣がへ。 西鶴

二八 花と雨

一 花のさだめ 本居宣長
 花は櫻櫻は山櫻の葉赤く照りて細きがまばらにまじりて花し

こよなくおく

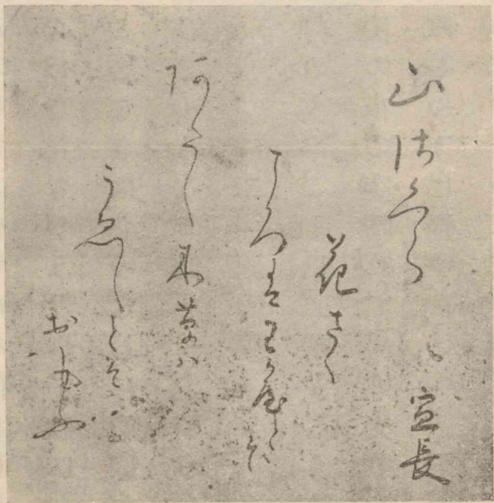
色はゆ

むげに
ねぶ
（二）残りなく散
るぞめでたき
櫻花、在りて
世の中は、はての
うければ、
（古今集）
不人知）讀

げく咲きたるは、またたぐふべき物もなく、うき世のものとも思は
れず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山櫻
こいふ中にも、品々のありて、細かに見れば、一本ごとにいさゝか變
れるところありて、またく同じきはなきやうなり。すべて曇れる日
の空に見あげたるは、花の色鮮ならず。松などの青やかに繁りたる
こなたに咲けるは、殊に色はえて見ゆ。空清く晴れたる日、日影のさ
す方より見たるは、匂こよなくて、同じ色とも覺えぬまでなん。朝日
はさらなり、夕ばえも。

梅は紅梅。ひらけさしたるほどぞいとめでたきを、盛になるまゝ、
に、やう／＼しらせゆきて、見所なくなるこそいと口惜しけれ。櫻の
咲ける頃までも散ること知らず、むげに匂なくねびれ萎みて残り
たるを見れば、げに在りて世の中は何事も皆かくこそと、見る春ご
ごに思ひ知らるかし。白きはすべて香こそあれ、見る目は品おくれ

宣長
山さくら花
さくころは
わかやとに
あたし木草
はうゑしと
そおもふ
したたかに



本居宣長筆蹟

たり。大かた梅の花は、小さき枝をものにさして近く見たるぞ、梢な
がらよりはまさされる。桃の花は、あまた咲きつゞきたるを遠く見た
るはよし、近くてはひなびた

山吹、燕子花、撫子、萩、薄、をみ
なへしなご、ごり／＼にめで
たし。菊もよきほごにつくる
ひたるこそよけれ。餘りうる
はしく、したたかに作りなし
たるは、なか／＼に品なく懐
かしからず。躑躅、野山に多く
にうるはしき花なり。

ことさらめく

心のなし

僻心

「そもく、かくいふは、皆おのが思ふ心にこそあれ。人は又思ふ心
異なるべければ、ひとやうに定むべきわざにはあらず。又今様の世
の人のもてはやすめる花ごも、世に多かるを數へいてぬは、こと
さらめきたるやうなれど、歌にも詠みたらず、ふるき物にも見えた
ることなきは、心のなしにや、懐かしからず覺ゆかし。されどそれは
たひとやうなる僻心にやあらん。」
——玉がつま——

二 雨の興

松平定信

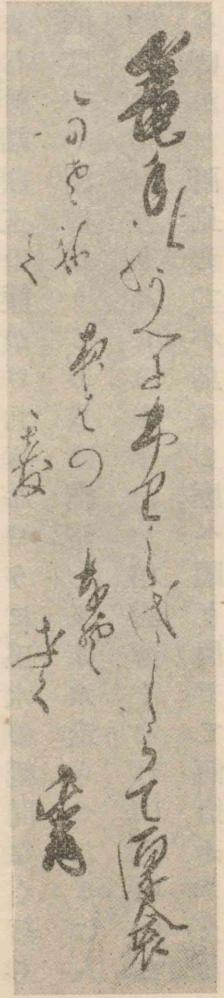
「月の夜半こそ思ふ隈もなく、心の底も澄渡りぬるものなれ。され
ど闇の夜の空晴れて星の光さやかなるに、風高く吹きかふは、又優
りぬるやうに覺ゆ。こいへば、雨ぞいと優りぬるを。こいふ、いかにこ
問へば、いでや早天の雨はさらなり。草木の花咲き實のるも、皆この
恵にこそあんなれ。又その感情の深さをいはば、けふは元日なりけ
り。こいふに、雨そぼ降りて霞み渡りたるは、げに春かなこそ思ふめ

軒の玉水

蜘蛛のい

籠手のうへ
にふりしを
しらて厚衾
かさねて夜
はの霞をそ
きく
樂翁

る。師走の晦のどやかに降りたるも、春待ち顔にていとをかし。すべ
て春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いとこまやかに降れ
るが、衣潤せども、降ることは見えず。軒の玉水も間遠に音して、住棄て
し蜘蛛のいに玉ぬく景色、庭の面の枯生の底に緑稍添行くも、柳の



松平定信筆蹟

絲の動きもやらで露添ふも、こもにいと長閑なり。燈火挑げても、何
となく光濕りたるに、鐘の音のほかに響き來るも、心澄渡りぬる
ぞかし。その外、梅が香の濕り、夜深く匂ひ渡るも、花に憂しと歎ちぬ
るも哀なりけり。春も老いゆく頃、蛙の時得顔にすだくもをかし。
杜鵑の初音いかにこ思ふ頃、むら雨のはらくこ降出でたるも、

打守る

繰言

五月雨の幾日も降暮して、書の卷々繰返しつゝゝゝゝたれば、何さなく世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。又暑さに堪へかぬる頃、雲の漲り出づる勢ありて、風一しきり吹落ちたるに、柳、蓮、なんごの葉、裏白く見せたるも涼し。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後には頻りに降來て、物音も聞えず、土の匂ひ來るもいご心地よし。軒端は玉の簾かけたらんやうに、玉水の絶間なく落ちたるに、庭は一つ湖になりて、あるは瀧落し、又は水走らせたるに、人々暫し物いはで、打守りゐたるもをかし。稍雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へ躍り出でて餌拾ふさまなり。初め雲の立出でし方は、はや空の一人緑に見えて、虹、なんご見ゆるに、木の緑の庭、涼に影見ゆるもいご涼し。老いたる女など、雷の音に驚きてはひ出でたるが、けふのは幼かりし時のごとよく霽れにけり。今時のはかく霽るゝこと稀なり。なんご、はや繰言いふもあり。彼は

とよむ

外山

かくあわてし。なんご、かたみにいひて笑ひとよみつゝ、けふは蚊も少かるべし。雷の音もいご微なり。この頃の暑さも忘れぬ。さて、端近う出づれば、夕月の光さし渡りて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の、物待ち顔に空打睨みて、ふつゝ、かなる音に鳴くもをかし。秋來る頃の雨はきのふに變りて何さなう淋し。萩の上風、外山の鹿の音、なんご、月よりも身にしむ心地ぞする。常に聞馴れし、笈の水の音までも、哀深くこそ。月の前のむら雨も亦をかし。まいてや、夜の寒の頃、鳴枯したる蟲の音の、雨のをやみに幽なる聲して、枕近く鳴きよるも哀なり。この雨に木々も染めなんご思へば、茸、なんごも生出でなん。栗も早落つべし。なんご、童の物淋しげに燈にむかひつゝ、言出づるも、げにさまゝなり。夜深き鐘の音の打濕るものから、さすがに秋は聲、冴えて聞ゆるにぞ、今は世に亡き友の事も思ひ出でて、鐘撞く人の心をも哀ご思ふばかり、感情は深かりけり。紅葉の染添

つきくし

おごろく

ふも、白菊の移り行きて一盛見するも、尾花の露重げに打萎れたるに龍膽の怨深く咲きたるあたりもつきくし。朝顔の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲出でたるが、晝過ぐるまでも凋み後れたる、亦哀なり。野分の風はおごろくしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがに哀を添ふるは、秋の習なるべし。時雨のささ音して、夕日に白く降來るも、又音かへて枕ごふもをかし。月よりも、闇の夜よりも、哀深きものには侍らずや。こいへば、かうやうに言並べては、げにもこいふべからんが、一年も降る心地してよみ見れば、この雨はをこつ日より降出でしをこ思ふ心は變らじこ、心の中に思ひて聽きゐるしも、亦をかしかりけり。

花月草紙

二九 春こ人

上 田 敏

生命の中流に棹さして十分に世の苦樂を味はひ、自己の意識を

春愁

因襲



上 田 敏

強めようとする者は、草木の角ぐみ渡る春の日を浴びて、失はれた力のこみに復歸するを感じ、新しい熱意を以て諸の印象を迎へる。郊外にも、都會にも、自然の風色に、人事の活動に、春光こ生氣が漲り渡るのだから、彼岸から八重までの櫻時ばかりでなく、木瓜も、海棠も、薔薇も、堇も、蓮華、蒲公英も、垣根の若葉も、鳥の聲もこまやかに懐かしく、しこくこ降る春の雨花見歸の土手のうへ、上潮ここもに春愁をもたらす夕暮の風、さまざまな夢思はせる靜寂な池の汀に菖蒲咲く頃も過ぎて、瑠璃色めいた碧空に、白い雲がふわ〜と動いて行く春こ夏の界までも、すべての景物は多感な人に迫つて來て、快くも亂心地ならしめる。世人動もすれば因襲に囚はれて、睦月、

衣更着、彌生の三月を春とし、櫻花の散るのを見て、季すでに過ぎた
 とする者もあるが、それは眞に春の心を解したものでない。春は淺
 いもよく、盛もよく、闌なるもよい。

春はたゞ人の心を浮立たせて、氣輕な戯に赴かしめるのではない。
 この時うるはしい萬物は、生の惱を感じて、精力の横溢に壓迫せ
 られる。そこに創作の苦痛がある。芽ばえ花咲くころは一種の緩和
 であつて、言はば重荷を下した時の安心に過ぎぬ。さればこの春色
 に對する人間の心も、萬物の活動に同情し共鳴して、ここに平行し
 た變化を感じ、偉大にして深沈たる大自然の節奏に合するのであ
 る。若し花を看てたゞ單純な官能の快感を貪るのみならば、同じ色
 の造花を見てもよいはずであるが、天然の千紫萬紅には、それ以上
 の深い意味が自ら籠つてゐて、思邪なき靜觀の人心に通ずる。舊く
 してしかも常に新しい春の循環來て、我等の今更に胸さわぎする

官能

靜觀

のは、この大自然の脉搏を感じるからである。爽快な夏も面白く、靜
 閑にして豊かな秋も樂しく、寂としてまた自ら人に勇あらしめる冬
 も佳いが、自然の胸を抱く春の心は、年ごとに變りなく切である。

誰いひそめた言葉であらうか、イタリーの古歌に、春は一年の若
 き時。若き時は一生の春。とある。春を愛するは若きを愛するのだ。春
 を惜しむのは青年の去易きを惜しむのだ。生と死と美と悦と愁と
 愛を歌ふ古今の抒情詩には、老と若さの對照がいつも伴奏をつけ
 てゐる。あゝ、少年にして智あらば、老年にして力あらばと、折返し折
 返し歌ひ續ける古の訓言を聽くごとに、春と少年のあわたゞしく
 過行くのが惜しくて堪らぬ。けふをつかめ。ミローマの詩人は教へ、
 「手折れよ薔薇を、花咲くひまに。けふがあすある世でもなし。」とドイ
 ツの詩にもいふ。この一見していかにも無分別な量見は、尋常の道
 學者や、考もなく口先でこれに雷同する俗流の思ふほごしかく思

老來

慮のない説ではない。智と力といづれか尊い。よしや智淺くとも、生命の水は汲みえられる。力なくては泉の傍へも近よれまい。初は淺かつた智も、苦樂の經驗に依つて、終に自らを深くする例はあるが、年少にしてその世の春にふさはしい思と行がなく、いたづらに老成を期して空しく貴重な光陰を費すのは、怯に非ずんば鈍である。この類の人、偶、老來こし方を願て一代の好機會を逸したのを悔む時、口にこそ出さないが、さぞ心中の殘念はつらいことであらう。

交感す

春の光の波に浮かんで、暢やかに朗かに生を樂しめ、時が食みへらす人間の力も、萬物の復活に交感して補はれて行く。しかもまた春の樂みには愁もある、悦もある、惱もあつて、それが我等の生活力を刺戟し、促進する。かくて晩春の候、膚滑に筋も弛んで、やゝ倦怠を感ずるのは、勢力過剰の爲であらうが、續いて來る夏秋の努力に具へる準備とも思へる。年ごこの春の光を身に浴びて、心の奥まで浸

St. Gothard.
スキス中央部
に連るアルプ
ス山脈のトン
ネル。長さ九
哩餘。

つてゐれば、老はおのづこ退散する。人若し熱情を以て春を追求したなら、その追求の間に自然と力は加り、老は堰きこめられよう。春の恵を輕んずるのは大の量見違である。天の與ふるを取らないと罰が當る。尤も一年中の氣候が餘り温暖であつて、凜烈な冬の寒氣と寂莫を痛切に感じない時は、勿體なくも春の有難味を忘れ易くなる場合がある。例へば、日本の太平洋岸、殊に東海道及びそれより西南部に住まふ人々の中には、また春が來たかくらゐの微温な感じを抱く者もあらう。しかしそれでは實にせつかくの樂しい世界を自分で狭くするのである。對照は眞に物の味を強めるもので、白雪の冬よりして直ちに陽春の盛光に接すると、眼も眩むばかりの美に打たれることがある。往年私は歐洲觀光の途すがら、スキスから嶺南清明の天地に移らうとした時、⁽¹⁾聖ゴタールのトンネルに入る前までは、連山湖面悉く飛雪に蔽はれて、冷たい白い夢の中

(Airolo) 聖ミタールの
トネルの南
口。

を通る心持であつたが、汽車が暫く暗黒道を過ぎて、忽ち青天の白光に接するや、思はず聲を揚げて南歐の讚美を唱へた。アイロロといふ里にかゝつた頃、南の方遙かにイタリーの平原が黄金の光に浮かんで、なごのわたりかと思ふばかりなのを望んだ時、つくづく春の徳を思つた。

若い美しい娘が餘りに手を大事にしてゐるのを見て、或人がどうせ終には萎びてしまふ手ではないかと、たしなめるつもりで言つた時、或夫人は口を挿んでいつた、しかし今はまだ萎びてゐない。人生に對する最も賢明な態度は、この一言に含まれてゐる。楽しい日に樂しめ、悲しみなければ悲しい日が來てからにするがよい。その時も若し出來るなら、自分の悲みをもつて近くの人々に氣持わるがらせずに濟ませたいものだ。傳道の士が言つた如く、すべてに時がある。播く時もある、収穫の時もある。樂しむ時もある、悲しむ

取越苦勞

時もある。そして春の日は樂しむ時である。躊躇なく、心配なく、取越苦勞なく、暢やかに、朗かに春の生を樂しめ。

— 思想問題 —

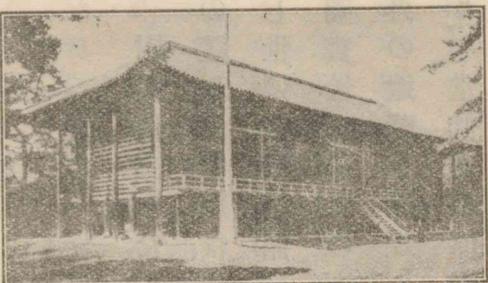
三〇 我が國の文化

笹川 種 郎

殘丹零瑩
浮圖寶輪
花明柳暗
春信

樹立物古りたる春日の森のほごり、目も爽に若草萌える三笠山の麓、朱の宮居は自然の翠色と相映じて、古佛刹の殘丹零瑩はありし世の榮華を語れる青丹よし奈良の舊都に遊び、轉じて郊外に浮圖寶輪を落日の下に訪ひ、更に花明柳暗の京の都を逍遙し、洛中洛外の遺蹟を探ると、そこに古日本の文化が歴然として展開せられる。七堂伽藍の偉觀を現じた斑鳩宮の名殘なる法隆寺は推古朝の文化を示し、東大寺正倉院には天平時代の絢爛たる文華を現存してゐる。日本の古文化がその搖籃期にあつた時、脈々たる一道の春信は、朝鮮半島より八重の潮路を渡つて我が國に入り、文化の基を

將來



正院

作つたのであつた。神功皇后の三韓征伐は、まづ半島文化との接觸を開き、尋いで應神朝に漢學の傳來あり、その後工藝の將來があつたが、後年欽明朝に佛教の渡來あつて、ここに外國文化の高潮を呈した。漢學の傳來は、支那の儒教思想を朝鮮半島が傳承したのを輸入したのであるが、佛教思想に至つては、源を印度に發したのが、大月氏を経て支那に入り、更に流れ、て朝鮮半島に渡り、これを我に傳へたのである。

いづれの國民にも國民性といふものがあるが、その國民性は必ずしも一定不變のものとは言へぬ。いかにも國民の血管に傳はつてゐる遺傳もあり、地勢なり風土なりの影響もあるが、外國の文化思想の影響は、國民性を知らず識らずのうちに變へて行く。今日の國

民性は、長い歴史の間に影響せられて出來上つたもので、この國民性を永久不變だと信ずれば、それは大なる錯誤である。しかし建國以來、遺傳なり、地勢なり、風土なりで打つて固めた國民性の基なるものが、おのづと存在してゐることは、否定すべきことではない。その基なるものは、即ち外國文化を同化すべき原動力である。

漢學の傳來があつて、我が國民性に多大の影響を及してゐるが、我が國民性の基即ち當時の國民性と、支那の國民性とは、おのづと異なるものがあつたから、これを傳承するに於ても、そのまゝではなかつた。支那は國土の大と、易姓革命の國柄とで、國民氣質が概して消極的退嬰的であつた。支那の道德には少からず消極道德を教へてゐるのでも、その一般を推知するに難くない。これに反して、一體に機敏で、伶俐で、尙武の氣象が盛で、開國進取の風に富んでゐた我が國民性の基は、積極的で開發的であつた。はつき開いて雪の如

處士

くに散る櫻の花が、我が國民性の象徴であることは、今もなほ稱せられてゐる。漢學が傳來し、支那の儒教思想が將來せられた時、朝鮮の博士王仁は梅を詠じて、咲くやこの花。といつたといふことである。いかにも梅花は支那の儒教思想、言換へると、支那古代の國民性を表したもので、雪霜の裡に凜たる芬香を放つてゐるところは、易姓革命の國に於ける處士氣質、即ち浪人氣質を表してゐる。支那詩人が梅花を山中の高士と歌つたのはこの點である。義、周の粟を食はずに、首陽山に餓死した伯夷、叔齊は古代支那の理想人物で、梅花を絶愛した林逋は布衣の標本、悠然南山を見た陶淵明は處士の代表者であつた。梅花はこれ等人物の擬化せられたものといつてよい。王仁が梅花を「この花」と稱したのは、いかにも儒教思想を表明したものである。しかし平安時代に入ると、歌に詠まれて花と稱するのは櫻花であつた。陽春四月、駘蕩たる春色、到らざる所なく、野には陽

炎燃え、山には霞たなびく時、櫻花在半天に雲と見まがふばかりに咲匂つたのは、いかにも陽氣で、生氣の潑刺たるものがあつて、梅花のごころなくしんみりとして陰氣なのとは、同じくない。この陽氣な國民氣質は所在に現れて、その文化は開發的に、進歩的に急速力を以て進展し、外國文化を傳承し、これを同化するこゝをやめないのである。

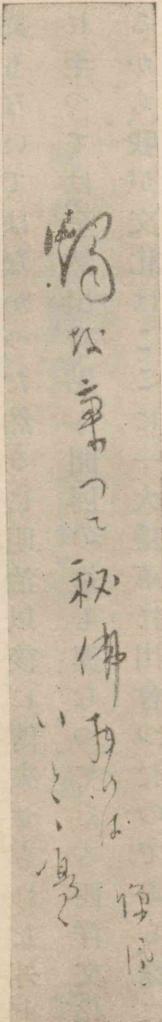
北方寒帯に近い地と、日本海に面する沿岸とは、季節に依つて陰鬱を極め、雲低く垂れて、日光を漏らさないこゝもあるが、一般より言へば、日本の地は氣候温和で、自然の景象は佳なりと言つてよい。島國であるから、随つて規模は小さくあるが、四季をりくくの景色は又なく美しい。八面玲瓏の玉芙蓉は、東海の天に朝して八朶の蓮華を開き、縹渺一萬頃の琵琶湖は、洋々として水に倒巒晴嵐を涵してゐる。山は紫に水は明に、瀬戸内海の烟波、關東信越諸山の空翠、往

天に朝す

く所として佳ならざるはない。雄大莊重の趣は乏しいが、典雅優美な風景には富んでゐる。随つて地勢の影響は、國民をして沈痛でなく輕快に、深からざるも廣く、哲學的でなくして寧ろ詩歌的ならしめた。更に佛教殊に禪の影響を受けて、頗るあきらめのよい氣質とならしめた。

日本は古來神ながらの道を傳へてゐる。随つて國民は敬神の念に篤い。祓ひ清めるといふ觀念からして、清淨潔白を好むに至つたのは、固より當然である。佛教の感化を受けて肉食の風少く、又土地が狭いから、牧畜國民でなくして、農業國民であり、國を環つて海なるところから、食肉人種よりも、寧ろ魚介を食ふ人種であつた。建築は木造で、衣服は絹木綿の類であるが、天平時代、平安時代と、江戸時代以後の國民氣質を見るに、その趣味性に於て、非常な懸隔がある。この間に一區劃を画がいてゐるのは、即ち東山時代である。支那の

燭を乗つて
秘佛めは
いとなく
臨風



筆郎種川笹

宋元時代の文化が、鎌倉時代頃から我が國に輸入せられ、禪宗も渡來し、東山時代に於てこれ等外來の文化宗教はその盛を極め、更に通俗的普遍的となつて、茶の湯の流行を來し、その影響は國民の衣食住及び趣味に及び、國民性にも少からぬ感化を來し、一般に恬淡を喜ぶ風となり、華やかなのよりも、寧ろ濫きを愛する風となつた。

外來文化は一たび應神朝に渡來し、二たび欽明朝に輸入せられ、その後引續き將來せられて奈良時代の文化となり、平安時代に入つてこれを同化し、その後室町時代に入つて來た新文化は、江戸時代に至つてこれを同化し、明治に至つて更に西洋文化の傳來があつて、その勢は滔々として極るところを知らざる状態である。欽明

朝に於ける外來文化は、いづれも紀元を劃してゐるもので、我が國文化史上の最も重要な時代である。一體我が文化史は、殆ど外來文化史で、外來文化があつて、その後これを同化する時代がある。しかし又更に新外來文化があつて、次に同化時代が来る。けれど要するに、從來の外來文化は東洋文化であつたから、多少とも共通した點もないではなかつた。然るに明治以後に傳來せられた外來文化に至つては、全然出發點も開展の途も異なつてゐる西洋文化であるから、我が文化はここに一大變革に出會つたのである。殊に交通の不便であつた古代と、彼我交通の容易で頻繁である今日とでは、その文化渡來の程度が違ふ。山鳴り谷應へるが如く、彼の思想文物は我に反響を與へる。曾てはフランスの自由民權思想が盛に輸入せられた。續いてドイツの軍閥主義が渡來して、我が國を軍閥化させた。歐洲大戰爭以後改造の聲が盛になつて、我が國に於ける思想

軍閥主義

界は空然の動搖を受けつゝある。とにかく明治以後傳來した外國文化と従前のものとは非常な相違があつて、衣食住が全然異なる。同じく、物質的に、精神的に非常な徑庭が存在してゐる。隨つて我が國民がこれより受ける影響の多大なことは言ふまでもない。

——日本繪畫史——

(一)法學博士。奈良縣の人。奈

徑庭

哲人
神のやうなえらい人。
哲士
道理にあかるい人。

生を厚くする
生活をゆたかにする。

國民的獨創へ〔自修文〕

岡

實

我が東洋諸國は西洋各國と異なり、精神上の事柄に於ては、往古より相當な發達を致して來たのである。即ち老莊、孔孟、釋迦その他の哲學者、道德家、宗教家を輩出させた。彼等は實に世界が產出した稀有な哲人哲士として仰がれて居るのである。精神界に於ける東洋は必ずしも貧弱でない。これに反して物質上の東洋はどうか。東洋から何か世界の新文明に貢獻する發明を出したことがあるか。例へば電車、電信、電話、汽船、汽車等、我々の生を厚くす

先達
指導者、先進
者

るところの物質上の利器は、すべて西洋各國から東洋に輸入したものである。彼の潜水艇といひ、飛行機、飛行船といひ、國を護るべき大切な道具までが、西洋諸國で發明せられたものである。東洋諸國はこれ等護國の要具ですら、自ら發明し得たものは殆どない。そこで東洋人の先達である日本國民としては、精神上に於て非白人の師範たることを期することも、又物質上の事柄に於ても、この従來の大缺點を補ふの決心を要するのである。

我々は一個人として健全な身體と健全な精神を要する。この二つのものが備つてゐなければ、競争場裡に優者たることは出來ない如く、國家としても、いかにその國に立派な文學者、美術家、哲學者が出ようとも、一面物質上の事柄に就いて優秀な技術者を出し、豊富な製産物と優秀な發明とを有するのでなければ、一國の體面は勿論、その生存をも保つことが出來ないのである。

諸君の中には他日法律、經濟、文學の如き學科を志望せられる方もあらうし、理工科、醫藥學の方面に志される方もあらう。たゞ諸君の専攻がいかなる部門に向ふにせよ、目下學校に於て諸君の學ばれる學科に就いては、文學的歴史的

偏倚
かたよる。

方面の研究に與へると均等の力を、數學、物理、化學等の方面にも注がなければならぬ。その間に偏倚するところがあつてはならぬ。この両者は車の両輪と同じである。大小輕重のあることを許さない。然るに近時青年の傾向として、妄りに精神的方面へ走りたがるやうである。宇宙は何であるとか、自然に超越する方法如何とか、精神的方面の思索寧ろ空想が餘り多きに過ぎはしないかと思はれる。若し一國の青年が擧つて茫漠捉へるところのない空想に耽つてゐたら、今日の日本帝國は將來どうなるであらうか。私はかゝる穿鑿、かゝる研究をば一概に不可とするものではない。哲學者も、宗教家も、勿論この社會に必要なものである。しかし中學時代に妄りにこの方面に囚はれた結果、物質的方面即ち數學、理化學等の研究を忽にすることがあつてはならぬと思ふ。

今歐米人の數及び發明の觀念に就いて少しく述べて見たい。歐米人は理化學の研究に依つていはゆる自然を征服してゐるのである。固より自然は一朝にして征服せられるものでない。これを征服するには階段がなければならぬ。その階段は數である。數字である。數學は歐洲の物質的文明の基礎である。多數の

歐米人はこの數とは友だちである。彼等は多くの事柄を數の方から考へ、數を以て言表す。例へば、彼等から「市」の説明を聴くとする。この市の人口は何十萬、面積は何々、歳入歳出の關係、租税に至るまで、比較的よく數を覺えて居つて、これに依つて説明する。又例へば、ここに一つの石材がある。これを建築に使うとする、我々としてはこの石材は果して堅いかどうか、堅く見えるから使つてもよからうくらゐの考である。然るに彼等はさうでない。一つの石があつたら、この石は硬度はいくらであるかと考へる。即ちその石を大きなプレスに掛けて見て、粉碎せられるまでの程度を試験した結果を以て言表す。大建築物の一番下の石はこれだけの硬度を持つて居る石でなければならぬとさめる。およそ事物の性質、規格、悉く數を以て計量測定して居る。

かやうに理學的方面だけでなく、化學の範圍に於ても數を以てすべての基礎を定め、一定の單位を決定することに依つて順々に「自然」に迫つて行く。「自然」といふ巨塞を征服する爲に、「數」といふ打破るべからざる「階段」を掛けて行くのである。東洋人中に數の觀念の少いのは重大な弱點である。諸君の中、法學や

(Press
重壓機)

造次にも
にはかの場合

顛沛にも
わづかの間で
仁論の里
仁篇に「君子
無終食之間
違仁造次必
於是顛沛必
於是。」

出藍
先生よりもえ
らくなること。
荀子の勸學篇
の「青出于藍
而青于藍」
から出た語

斗筭の輩
つまらぬもの
ども

文學をやる人も、或は哲學をやる人も、數といふことに就いては十分に學校時代に於て頭を練り、泰西文明の自然征服の基礎のここに在ることを知つて、造次にも顛沛にも數學を怠つてはならぬ。法律も經濟も財政も、數の頭が缺けて居つては、本物の研究や立論は出来ないのである。哲學も文學も同様である。次に數を基礎として發明のことを述べる。發明とは何であるか。外國では發明といふ言葉に非常に重きを置いて居る。技術家を批評するにしても、彼には果して發明の力があるか。この人間はたゞ他を模倣するに止つて居るか。或はまたこの人は模倣するばかりでなく、いはゆる出藍の譽を得る人がどうかといふ風に、人間を二つの階級に區別する。若しその人が發明力のない人間なら、これは凡庸の人、斗筭の輩としてしまふ。發明力のある人こそ始めて社會文明に貢献し、日進月歩の文明に寄與するところのある人としてこれを尊敬するのである。大學の始に「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新。」といふ文句がある。これは實に善い言葉である。精神上的意義で日新といふ言葉は我々が古くから使ふ言葉であるに拘らず、物質上の日新といふことには從來縁が遠かつたので

ある。物質上の日新といふ觀念は東洋には殆どないといつてよい。その結果として發明家を尊敬したり、又發明家にならうと考へて居る人が昔から非常に少いやうに考へる。まことに慨嘆に堪へないことである。發明のない國民は進歩のない國民である。前にもいつた如く汽車、汽船、潜航艇、水雷艇、飛行機、飛行船悉く歐米人の發明を承繼いたのである。諸君の着て居るところの着物の色はここで生産せられたものであるか、遺憾ながら、すべての色は概ねドイツで拵へられたアニリン染料の色であつた。今では我が國にも生産するが、量と價格に於て遙かに彼に及ばない。一時ドイツの色は世界人類を掩うた。ドイツは石炭を乾餾して、瓦斯及びコールタールといふ眞黒なものの中から各種の色を取る。かくして二三億圓の生産物を得て、これを以て世界の色を獨占した。皆これ大發明の結果である。ドイツと國交が絶えた時は、我が國の人は皆白い着物を着なければならぬ大恐慌の時代を迎へた。政府はどうかして染料を拵へなければならぬといふところから、國庫が補助を給して染料を拵へる會社を立てた。戦後又ドイツとの競争で困つて來た。人造樟腦これ亦石炭から出る。

コールタールの中から取つて來るのである。我々が風邪を引いた時に飲むアンチピリン、サリチルサン、アスピリン等これ亦石炭から取る。その他防腐劑として必要な石炭酸これ亦石炭の中から出て來るものである。廢物同様なものの中から數億圓の新しい富源を發明した發明家の偉績は、實に驚歎と畏敬に値する。以上の例に類したことは、他の列國に於てもいくらかでもある。我々は泰西の文物を輸入して以來すでに六十年に垂んとして居る。然るにこの間果していかなる發明を以て世界文明に寄與したか。人類の幸福に寄與したか。今の青年の欲するところはたゞ外國の本を讀み、外人の説を聽くのみである。獨創といふことは我が國に少い。獨創しなければならぬといふ覺悟も薄い。この原因を考へるに、東洋人が徒に精神上のことにのみ考を馳せ、物理、化學、數學等物質上のことを卑下して多く力を注がず、これを賤しむやうな思想の傾向が、我々の父祖以來我々の頭にも血液の中にも遺傳し來つて、今なほ殘留して居るからである。由來發明は利用厚生上最も大切なものであると同時に、又名を後世に遺すものである。方今の時勢に處し國を憂へ國を愛する人は、必ずや發明獨創

の覺悟がなければならぬ。

以上は主として物質上のことを述べたが、發明の事は必ずしも理化學の方面にのみ限らない。精神上の事柄に就いても、亦同様でなくてはならぬ。最近に至つて西洋の精神界は非常な變化を呈して來た。新思想を支配する偉人が輩出しつゝある。物質界、精神界ともに革新の氣運が展開して來た。我が東洋諸國に於ては單に物質界に於てその教導者を出し、發明家を出さないのみならず、精神界に於ても今なほ多くは古人の教をのみ祖述するでなければ、なま／＼しい外來説を、流行を逐うて追求するだけである。私は甚だ不満足と不安に堪へない。戦後の今日は最早模倣の時代でない、國民的獨創の時代である。諸君はその急先鋒として奮勵しなければならぬ。

——國民的創作の時代——

祖述す
或もその事を基礎としてそれを敷衍してのべらる

改訂實業帝國讀本 卷八終

昭和三年度臨時定價 七拾圓

大正九年十二月二十八日印
大正九年十二月三十一日發行
大正十四年一月二十三日改訂印刷
大正十四年一月二十六日改訂發行

改訂實業帝國讀本與付

全定	至目	卷一	各金四拾八錢	昭和	自	卷一	各金八拾二錢
十冊	卷四	各金四拾參錢	二時	卷四	各金七拾二錢		
價	卷五、卷七	各金四拾貳錢	年度	卷五、卷七	各金七拾一錢		
	卷六、卷八	各金四拾貳錢	度價	卷六、卷八	各金七拾一錢		
	卷九、卷十	各金參拾七錢		卷九、卷十	各金六拾三錢		

著 者 芳 賀 矢 一

發 行 者 兼 刷 行 者 合資會社 富 山 房
東京市神田區通神保町九番地

代 表 者 合資會社 富 山 房 社 長 坂 本 嘉 治 馬



發行所

東京市神田區通神保町九番地

合資會社 富 山 房

電話神田 二四二、二四三、二四四番
振替口座東京 五〇一 番

卯三以年乙紀廣野七郎

庫
25
350

広島大学図書
2000302850

